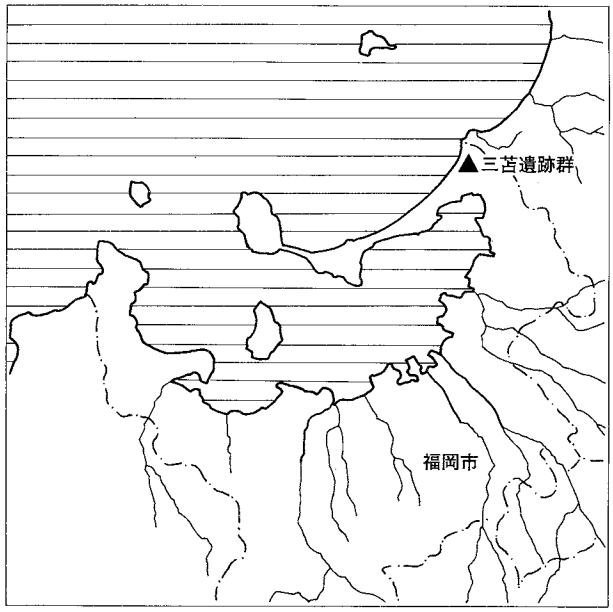
三苫（みとま）遺跡群 3

――第４次調査報告――

福岡市埋蔵文化財調査報告書第548集



遺跡調査番号　9636
遺跡略号　MTM-4

１９９８

福岡市教育委員会

序

玄海灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代にいたる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では、近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前の発掘調査を実施し、記録保存に努めているところであります。

本書は、道路拡幅に伴い実施された三苫遺跡群の第４次調査の成果を報告するものであります。発掘調査では、中世の水路などの潅漑施設が検出され、この地域の中世における開発の歴史を明らかにする貴重な成果をあげることが出来ました。

本書が、埋蔵文化財への市民の方々のご理解と認識を深める一助となり、また学術研究の資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで、関係各位をはじめ多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表します。

平成10年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　町　田　英　俊

例　　言

1．本書は、福岡市教育委員会が、平成８(1996)年９月２日から同年９月30日まで発掘調査を実施した、都市計画道路和白新宮線の拡幅工事に伴う三苫遺跡群の第４調査の報告書である。
2．遺構の呼称は記号化し、掘立柱建物をＳＢ、溝状遺構をＳＤ、土坑をＳＫ、性格不明遺構をＳＸとした。
3．本書に用いる方位は磁北である。またレベルは都市計画道路の工事基準点の標高を移動したものである。また、調査区の座標は任意のものである。
4．本書に用いる遺構実測図は、久住猛雄、北村幸子が作製した。
5．本書に用いる遺物実測図は、久住、森部順子、甲斐田嘉子が作製した。
6．本書に使用した図の整図は、入江のり子、平井裕子、成清直子が行なった。
7．本書に用いる写真の撮影は全て久住が行なった。
8．本書の編集・執筆は久住が行った。
9．本調査に関わる遺物・記録類（図面・写真）は福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。広く活用されたい。

遺跡調査番号	９６３６	遺跡番号	ＭＴＭ－４	分布地図番号	０２８－０１０８
調査地地籍	福岡市東区三苫６丁目15番			事前審査番号	８－１－０９
開発面積	7,000㎡	調査面積	206㎡	調査期間	1996年９月２日～９月30日

横山浩一殿寄贈

本文目次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査の組織……2
Ⅱ　遺跡の立地と地理的歴史的環境……2
　1　遺跡の立地と既往の調査……2
　2　周辺の遺跡と歴史的環境……4
Ⅲ　調査の記録……4
　1　試掘調査の概要……4
　2　本調査の経過と概要……6
　3　検出された遺構……6
　　（1）溝状遺構（SD）および溜井状遺構（SX05）……6
　　（2）掘立柱建物（SB）……11
　　（3）水田……12
　　（4）その他の遺構……12
　4　出土遺物……13
　　（1）遺構出土遺物……13
　　（2）遺構検出時他出土遺物……17
Ⅳ　まとめ……18
Ⅴ　和白新宮線試掘調査で出土した貝層サンプルの貝種同定と炭素14年代測定結果について
　（パリノサーヴェイ株式会社）……21

挿図目次

Fig.1．三苫遺跡群の周辺遺跡分布図（1/50,000）……1
Fig.2．調査地点周辺図（1/8,000）……2
Fig.3．試掘調査時各トレンチ土層概略図（1/50）……3
Fig.4．調査区壁面土層柱状図（1/40）……5
Fig.5．調査区全体図（1/80）……折り込み
Fig.6．調査区概略図（1/200）……7
Fig.7．SD-04土層断面図（1/40）……8
Fig.8．SD-04・SX-05縦断面図（1/80）……9
Fig.9．SD-02・SX-05土層断面図（1/40）……10
Fig.10．SB-01平面図・断面図（1/50）……11
Fig.11．杭列（SX-06）実測図……12
Fig.12．SD-04出土土器・陶磁器（1/3）……14
Fig.13．SD-04・SD-02・SD-08出土土器・陶磁器（1/3）……15
Fig.14．SD-04出土石製品（1/3）……17
Fig.15．SD-04・SX-05・SD-08出土木製品（1/2）……18
Fig.16．遺構検出時（包含層）出土土器・陶磁器（1）（1/3）……19
Fig.17．遺構検出時（包含層）出土土器・陶磁器（2）（1/3）……20
Fig.18．瓦質・土師質土器茶釜印刻文拓影（約1/2）……20

本文写真目次

PH.1．SX-05出土木椀底部外面写真……18　PH.2．試掘トレンチ埋土出土李朝青磁外面…20

表紙写真

裏表紙（PH.3）　三苫遺跡群周辺の航空写真

図版目次

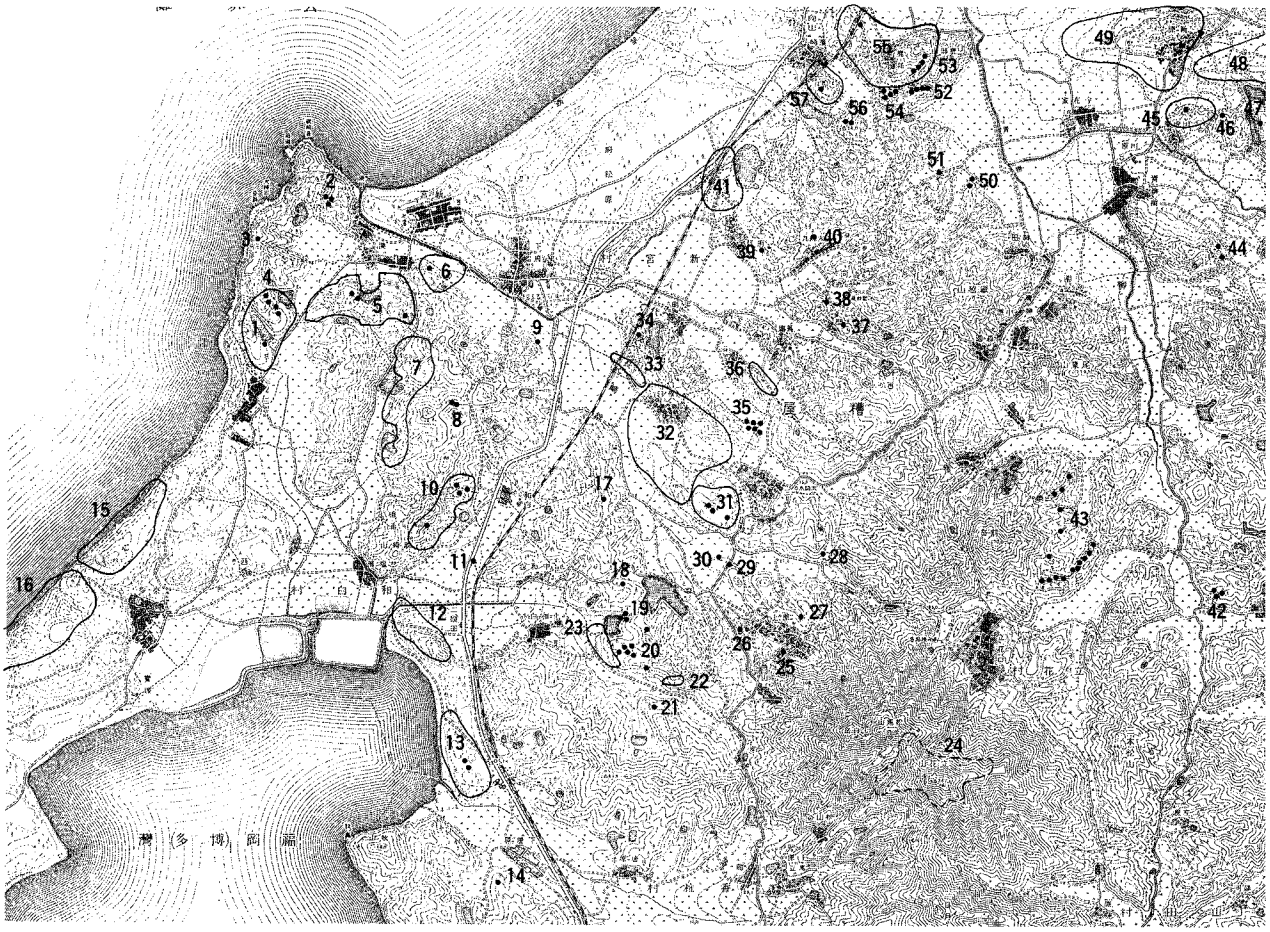
PL.1
1．調査区全景（北から）
2．調査区全景（南から）
3．調査区南部水田址・杭列（南から）
4．SB-01出土状況（南から）
PL.2
5．SD-04（Ⅱ・Ⅳ区）・SX-05（南から）
6．SD-04Ⅴ区南側土層状況（北から）
7．SD-04Ⅶ区北側土層状況（南から）
8．SD-04出土瓦質土器茶釜
9．遺構検出時（包含層）瓦質土器茶釜
10. SD-04出土備前焼擂鉢
11. (10に同じ、内面)
12. SD-04出土土師質茶釜
PL.2
13. SD-04出土瓦質擂鉢（左）、検出時(包含層)出土備前擂鉢（右）
14. (13に同じ)
15. SD-04出土李朝青磁小碗
16. (15に同じ、内面)
17. SD-04出土瀬戸美濃系天目碗
18. (17に同じ、内面)
19. SD-04出土明代染付碗破片
20. 検出時（包含層）出土唐津焼（？）小碗
PL.3
21. 試掘調査第6トレンチ出土貝類
22. 試掘調査第7トレンチ出土貝類
23. 試掘調査第5トレンチ出土貝類

Ⅰ．はじめに

1．調査に至る経緯

1996（平成８）年５月13日、土木局道路建設部街路課から、埋蔵文化財課へ、福岡市東区三苫地内他における都市計画道路和白新宮線の道路整備事業に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。当該地の近辺では、平成７年度の三苫小学校の建設に先立って、古墳時代を主とする旧石器時代から中世までの遺構・遺物が検出されており（第２・３次調査、Fig.２）、周辺に遺跡の広がりが予想されるため、埋蔵文化財課では、1996（平成８）年６月16・23日の二日間、試掘調査を行なった。その結果、試掘トレンチの一部に埋蔵文化財の存在が認められたため、対象地のうち360㎡ について発掘調査が必要である旨を土木局道路建設部街路課に解答した。その後の協議により、同年度中に発掘調査を実施することで合意し、1996年９月２日から同年９月30日まで調査を行なった。

なお、整理作業は1997（平成９）年度に行い、報告書を作成した。



1.三苫遺跡群　2.湊古墳群　3.三苫釘ヶ浦古墳　4.三苫京塚古墳群　5.三苫永浦遺跡群　6.下府遺跡(古墳群)　7.下和白遺跡群　8.飛山古墳群　9.人丸古墳群　10.塚原古墳群　11.中和白古墳　12.梅ヶ崎遺跡　13.唐ノ原遺跡(古墳群)　14.香住ヶ丘古墳　15.三苫黒山遺跡　16.奈多砂丘Ａ遺跡　17.上和白古墳　18.猿の塚古墳　19.宮の前古墳群　20.高見古墳群Ａ・Ｂ群　21.高見古墳群Ｃ群　22.高見窒跡　23.上和白遺跡　24.立花城跡　25.原上古墳　26.笹熊１号墳　27.平原古墳　28.春上古墳　29.宮崎古墳　30.瀬戸の坊古墳　31.三代須川遺跡(古墳群)　32.夜臼・三代遺跡群　33.白峯遺跡　34.高旅古墳　35.大森古墳群　36.神木遺跡　37.岩井山古墳　38.新徳古墳　39.下村古墳　40.太郎丸古墳　41.上府遺跡　42.香ノ木古墳群　43.瓜尾・梅ヶ内古墳群　44.道田古墳群　45.川原庵山遺跡(古墳群)　46.下府当古墳　47.原口Ａ1号墳　48.高木遺跡　49.太田町遺跡　50.三田浦古墳群　51.小牧古墳群　52.浦口古墳群　53.唐ヶ坪古墳群　54.日焼古墳群　55.鹿部・東町遺跡群　56.播磨古墳群　57.権限古墳

Fig.１　三苫遺跡群の周辺遺跡分布図(1／50,000)

1902陸地測量部を1/20,000を一部改変(『三苫永浦遺跡』より引用、一部改変)

2．調査の組織（当時）

調査委託：福岡市土木局道路建設部街路課
調査主体：福岡市教育委員会　教育長　町田英俊
調査総括：埋蔵文化財課長　荒巻輝勝
埋蔵文化財課第二係長　山口譲治
調査庶務：埋蔵文化財課第一係　内野保基
調査担当：大規模事業等担当課　久住猛雄
事前審査・試掘調査：埋蔵文化財課第一係
杉山富雄、榎本義嗣
調査補助：北村幸子
調査作業：阿部幸子、金子二三枝、木村文子、幸田信乃、指原姶子、佐々木美帆、清水耕平、塚本よし子、寺園恵美子、中野裕子、松岡芳枝、森　教子、安元尚子、柳瀬　伸、脇田　栄
整理作業：成清直子、平井裕子

以上の他、発掘調査においては長家　伸（埋蔵文化財課）の御助力を賜った。整理作業においては、入江のり子、富田輝子、甲斐田嘉子、森部順子の御協力を得た。その他、整理作業中において佐藤一郎・瀧本正志(埋蔵文化財課)、吉留秀敏(埋蔵文化財センター)、森本朝子、田中克子の御教示を得た。以上の方々には、記して謝意を表したい。また調査時には、隣地の休耕田を排土置場としたが、その土地所有者である堺秀喜、堺静馬の各氏には、この場を借りて感謝申し上げたい。

Ⅱ．遺跡の立地と地理的歴史的環境

1．遺跡の立地と既往の調査

三苫遺跡群は、博多湾の北側を閉ざす海の中道の北側の基部、玄界灘に面した第三紀堆積岩によって構成されている海岸丘陵の東側緩斜面に位置する。なお第4次調査地点は、その丘陵の一部が舌状に東側に下りた部分にあたり、東側には和白川が流れ、後背湿地となっている。南の和白干潟は、近世以降の干拓により陸化したものであり、以前は海が深く湾入していた。またさらに、縄文時代には海進により、現在海岸線から最大 1.5km の部分まで海であったと推定される（第Ⅴ章の自

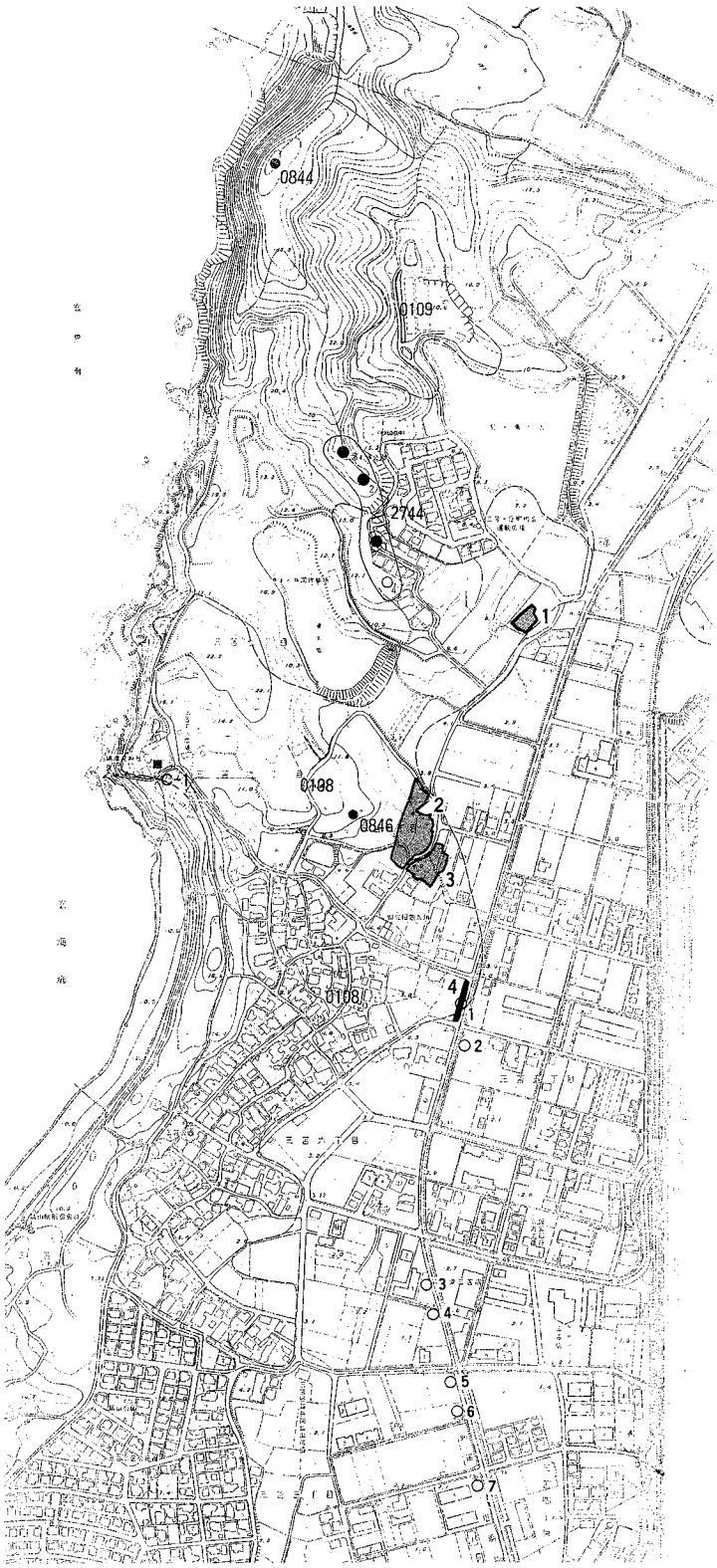


Fig.2 調査地点周辺図（1/8,000）
※ゴシックは調査次数、小文字1～7は試掘調査トレンチ番号

然科学分析参照)。一方、北の湊川流域（市境から新宮町）も同様に、縄文海進における数kmの湾入が推定されている。周囲一帯は、立花山・城ノ越山・三日月山等の標高400m以下の低山地から西南方向に分布する香椎・新宮丘陵、および小河川によって開析された平野・低地からなる。地形的には、多々良川以北の丘陵地帯により福岡市中央部から画され、市東部地区を形成する。

三苫遺跡群のこれまでの調査は、今回の第4次調査地点よりも北側の2ケ所について行なわれている（Fig. 2）。第1次調査地区は、後述する三苫京塚古墳のある丘陵から東に向かって突き出す低丘陵上に立地する。古代と中世の掘立柱建物、土坑、柱穴、集石遺構などが検出された。古代の遺物には、鉄滓や玄界灘式製塩土器が含まれ、調査者は「贄」の貢納をした「厨戸」の可能性を指摘している。第2・3次調査地区は、小学校建設に伴う一連の調査であるが、第1次調査の南側の別丘陵の先端部である。旧石器・縄文時代の石器類、弥生時代の竪穴住居、古墳時代の竪穴住居、倉庫と見られる掘立柱建物などが多数検出された。弥生時代では青銅製鉇が出土し、古墳時代の竪穴住居では5世紀前半の竈付き住居や、6世紀の滑石の玉作工房が注目される。

遺跡群の広がりの北半中には三苫京塚古墳群が分布する。古墳群の立地する丘陵は、和白川と湊川の分水嶺である。数基からなる古墳群の盟主墓である三苫京塚1号墳が調査されている。大形の単室横穴式石室を内部主体とする。調査前に墳丘の多くが削られ、墳形は明らかでない。報告では直径15m程度の円墳を想定するが、墓道が深く調査区外に延びることから、より大きな墳丘規模を想定する意見もある。石室は荒らされていたものの、三累環頭大刀、鉄鏃、弓金具、馬具のセット、耳環や玉類などの装身具が出土し、当初はさらに豊富な副葬品が存在したと考えられる。出土した須恵器は、ⅢB期からⅣA期であり、この小地域での最後の首長墓と考えられる。

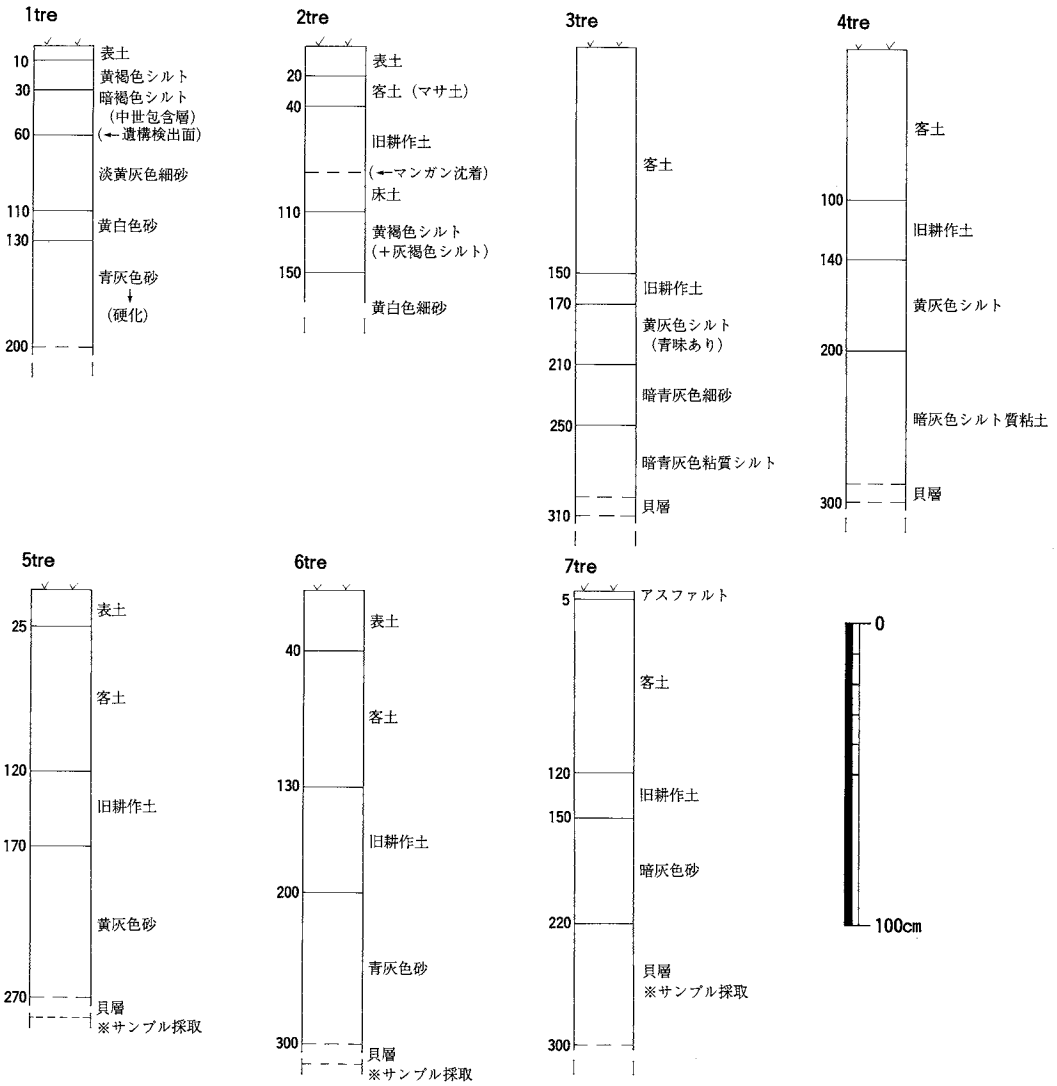


Fig. 3　試掘調査時各トレンチ土層概略図（S=1/50）　※左の数字はG.L.からの深さ（cm）

このように三

苫遺跡群は、旧石器時代から中世に及ぶ、和白川流域では比較的継続性のある遺跡であり、特に古墳時代後半期においては地域の中で重要な位置を占めた集落であることが考えられる。

2．周辺の遺跡と歴史的環境

三苫遺跡群の周辺では（Fig.1）、低地を隔てて北東の丘陵上に位置する三苫永浦遺跡の調査成果が重要であろう。区画整理に伴い大規模な調査が行なわれ、旧石器時代の遺物から弥生・古墳時代を主体とする遺構群を検出している。特にH地区の弥生時代中期の「溜井」群は、当時の潅漑技術や水田経営を考える上の好資料であり、J地区では弥生時代中期後半の高地性集落が検出されている。また三苫永浦1・2号墳は、全長26～28mの小規模な前方後円墳であることが判明した。報告では1号墳が6世紀中頃、2号墳が6世紀初頭とされているが、1号墳の須恵器はMT15（Ⅱ期新相）に遡ると思われ、2号墳の須恵器器台片は小片であり、新しい型式になる可能性も否定できないため、その築造順序は逆転する可能性もある。いずれにしてもこれらはこの地域の首長墓であり、この系譜下に上述の三苫京塚1号墳があるのだろう。

三苫遺跡群の東方では下和白遺跡が調査されている。旧石器・縄文時代の遺物、弥生時代の溝・包含層が検出されたほか、古墳群（飛山古墳群）が調査された。飛山古墳群は、丘陵頂部に3基の石室が隣接する。いずれも径10mの円墳とされているが、近接しすぎており、地形的にも共通のより大きな墳丘であった可能性も残る。1号墳は竪穴系横口式石室で、鉄刀・剣・刀子、玉類などが出土している。滑石製の有孔円板や臼玉を多量に埋納しており、三苫遺跡群第2・3次の玉作工房との関連性も示唆されるものの、古墳の時期はやや古く5世紀後半～末であろう。三苫永浦1・2号墳の前の首長墓であろうか。また、さらに東方には（三苫遺跡群から約2.5km）、縄文時代晩期末・弥生時代から古墳時代に至る、地域の拠点集落である夜臼・三代遺跡群（新宮町）があることも触れておきたい。「夜臼式」の指標遺跡であり、縄文時代晩期から弥生時代の貝塚、竪穴住居、貯蔵穴などが多数検出されており、弥生時代後期には大規模な環濠集落となり、瀬戸内系など外来系土器が他より目立って出土している。古墳時代の集落では、前期～中期の大量の土師器に伴い、多数の韓式系土器が出土していることが特筆される。

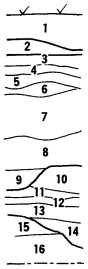
三苫遺跡群の東南約3kmでは、上和白遺跡が調査され、7～8世紀の製鉄関連遺構群が検出されている。同様に南南東約3kmには唐原遺跡がある。弥生時代後期から古墳時代前期の大規模な集落遺跡であり、鉄製釣針・石錘などの漁撈関連遺物が多く出土しているほか、外来系土器が比較的多く、陶質土器や韓式系土器も含まれている。なお中世では、周辺に傑出した遺跡はないものの、東南5kmには立花山城がある。立花山城は戦国期を通じて大友氏の家臣が駐屯し、大友氏の博多支配の拠点となっていた。三苫周辺では、文献では三苫氏の名が見え、鎌倉時代には「小島庄」という荘園があったという（竹内理三編『荘園分布図』下）。しかし、弥生～古墳時代・古代に比べて、この地域の中世史に関する考古学的資料はまだまだ少ないのが実情であり、今後の調査に期待される。

Ⅲ．調査の記録

1．試掘調査の概要

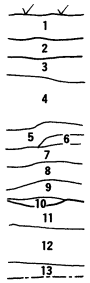
試掘調査は1996年6月16・23日に実施されている。工事予定区間に計7本の試掘トレンチを入れ、埋蔵文化財の有無を確認した（Fig.2）。その結果、最も北端に設定した第1トレンチにおいて地表下60cmの所で中世の包含層を検出し（Fig.3）、発掘調査の必要ありということになった。この地点は、以前の分布地図では、三苫遺跡群の想定範囲の外であったが、これにより遺跡群が東へ広がったことに成る。一方、他のトレンチでは遺構・遺物が検出されなかった。しかし、第3～7トレンチにおい

土層Ⅲ　3,000m



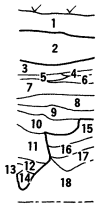
1．暗黄褐色耕作表土
2．客土、暗褐色土
3．褐色～暗褐灰色土、鉄分多い
4．暗褐灰色砂質シルト、鉄分若干、水田？
5．灰色砂質シルト＋にぶい黄色砂、鉄分、マンガンあり
6．鉄分あり、マンガン多い、灰黄～灰白色砂質土層（細砂）
7．灰黄褐色砂質土、マンガン沈殿多い
8．黄灰～灰色砂質土、マンガンあり
9．黄灰～灰色砂質土＋にぶい黄橙色砂
10．褐灰～灰黄褐色シルト、水田アゼ？
11．褐灰～灰色シルト、水田か、にぶい黄橙色砂まじる
12．上面鉄分あり、マンガン沈殿あり、暗黄色～暗灰粘質シルト
13．SD02覆土、黄灰～灰色シルト、鉄分、マンガン少し
14．SD02覆土、灰色～暗灰色砂質シルト＋砂＋灰色粘土
15．明灰色粘質シルト＋明黄褐色シルト、しまりあり、地山
16．灰色～明黄灰粘質シルト、しまりあり、地山

土層Ⅱ　3,100m



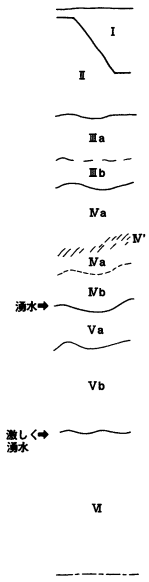
1．暗褐色耕作表土
2．客土、黒褐色土
3．灰色砂質シルト、鉄分沈殿
4．暗灰色砂質シルト、にぶい黄色砂まじり、マンガン沈殿
5．黒褐色砂質シルト、しまりあり、鉄分多い（水田？）
6．黒褐色粘質シルト、マンガンあり
7．黒褐色粘質シルト、鉄分多い、しまりあり（水田？）
8．SD04上面覆土、黒褐色粘質土、鉄分・マンガンあり
9．明灰色砂＋灰白～灰色シルト（細砂主体）
10．明緑灰粘質シルト＋暗灰色砂質シルト
11．明緑灰粘質シルト、鉄分若干（地山）
12．明緑灰粘質シルト、しまりあり（地山）
13．明緑灰シルト（地山）

土層Ⅰ　3,000m



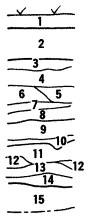
1．黒褐色土、耕作表土
2．暗黄灰色土、客土、鉄分多
3．暗黄灰色砂質土、鉄分、マンガン多
4．明黄褐色砂＋３層の互層
5．暗黄褐灰色砂質土＋暗黄褐色砂、シルト質、鉄分あり（水田？）
6．暗灰砂質シルト、しまりあり、マンガン多く沈殿
7．黒褐色砂質シルト、鉄分、マンガン多く沈殿
8．暗黄灰色～黒褐色砂質シルト、マンガン沈殿
9．暗黄灰色砂質シルト
10．黄灰色砂質シルト＋灰白色シルト（地山）ブロック
11．黄灰～暗灰色砂質シルト＋灰白色細砂シルト若干
12．灰白色細砂シルト＋灰色シルト（暗灰色）
13．11層と同じ
14．灰色シルト＋灰白色細砂シルト（11～14遺構？）
15.～17．灰白色シルト、上方粘質気味から下方細砂質へ漸移
18．灰白色～淡黄色粘質・砂質シルト、しまりあり
（15～18 地山）

調査区深堀土層　2,200m



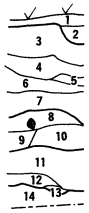
Ⅰ．包含層、遺構（SD02）
オリーブ黒色～暗灰色シルト
Ⅱ．灰白色細砂シルト（淡青灰色）
Ⅲa．青灰色シルト
Ⅲb．明青灰色粘質気味シルト
Ⅳa．灰白色細砂質シルト、有機物少量あり
Ⅳ'．黄橙色シルト、有機物を含む
Ⅳb．明黄橙色細砂質シルト、鉄分沈殿
Va．灰色シルト（やや砂質）、有機物微量
Vb．灰色（やや暗い）シルト（やや粘質）、
有機物微量あり
Ⅵ　青灰色シルト、しまりあり、粘性ややあり

土層Ⅵ　3,000m



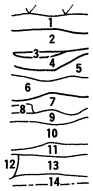
1．黒褐色土、砂まじり耕作表土、鉄分・マンガン沈殿
2．灰褐色砂質土、客土、マンガン沈殿
3．灰色砂質シルト、明黄褐色砂まじり、鉄分あり
4．黄灰～暗灰色シルト、マンガン沈殿（水田？）
5．黄灰～灰色やや粘質シルト、マンガンあり
6．灰色砂質シルト、３層に似る、（畦畔？）、マンガンあり
7．灰色細砂質シルト＋明黄褐色砂
8．黒褐色粘質シルト、（水田？）、鉄分・マンガン微量
9．黒褐色砂質・粘質シルト
10．灰色～暗灰色細砂＋明黄褐色砂
11．SD04覆土、黒褐色砂質・粘質シルト、しまりややある、
鉄分・マンガン沈殿あり
12．灰色～黄灰色、砂質シルト～砂
13．黄灰色砂質シルト＋灰色砂（12層）
14．灰黄色砂質シルト＋灰色砂まじり、鉄分若干
15．地山、灰黄～にぶい黄色粘質シルト、鉄分多く沈殿

土層Ⅴ　3,000m



1．にぶい黄褐色耕作表土
2．黄褐色～褐色土、鉄分あり、砂まじり
3．浅黄橙色細砂＋明黄褐色砂鉄分～マンガン沈殿
4．にぶい黄橙色砂質シルト（細砂）
マンガン多く沈殿
5．浅黄橙色砂質シルト＋明黄褐色
砂質シルト、鉄分沈殿
6．にぶい黄褐色砂質シルト～細砂、
マンガン・鉄分若干あり
7．にぶい黄橙色砂質シルト（細砂）
＋褐灰色砂質シルト
8．黄灰（灰）色シルト、しまりあり、杭材を含む、明黄灰砂まじり（水田か）、鉄分若干あり
9．暗黄灰やや粘質シルト、しまりややあり、マンガン若干含む
10．暗灰色やや粘質シルト、灰黄色砂含む
11．（暗灰～）黒褐色粘質シルト、SD02覆土
12．（黒褐色～）暗灰色砂質シルト、灰白色細砂
13．灰色砂質シルト、灰白色細砂含む、SD02覆土
14．地山、（明）灰色シルト、やや粘質

土層Ⅳ　3,000m



1．にぶい黄褐色耕作表土
2．客土、にぶい黄褐色土、鉄分あり、
しまりあり
3．暗黄灰砂質シルト、４層との間に褐色の鉄分沈殿
層あり
4．黄灰（灰色）砂質シルト＋にぶい黄色砂、
マンガン沈殿あり
5．暗黄灰～灰色砂質シルト、にぶい黄色砂まじり、
マンガン沈殿若干あり（水田か）
6．にぶい黄橙色砂＋灰色シルトブロック、
鉄分、マンガン沈殿若干
7．にぶい黄橙色砂＋明黄褐色粘質シルトブロック、
鉄分沈殿若干あり
8．灰色粘質シルト層
9．７層と８層の互層
10．灰色粘質シルトとにぶい黄色砂の混合層
11．９層と同じ、炭化物含む
12．灰色砂質シルトと黄褐色砂の互層
13．包含層又は遺構、灰色～暗褐灰色砂質シルト
14．地山又は旧河川包含層、暗黄灰～灰色シルト＋
灰黄色砂の互層、シルト主体

Fig.4 調査区壁面土層柱状図（Ⅰ～Ⅵの位置はFig.6参照）　(S=1/40)

ては地表下2.2～3.0mのところで自然の貝層を検出し、縄文海進の痕跡と予想された。このうち第5～7トレンチの貝層について、そのサンプルを採取し、貝種の同定と炭素14年代の測定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託している。その調査結果については第Ⅴ章を参照されたいが、炭素14年代は縄文時代後期に対応する測定値が得られており、縄文海進を裏づけている。資料は自然遺物であるが、和白潟における当時の海岸線や環境を復元する上で貴重な成果であり、この地域における当時の人間の活動を復元する上での基礎資料にもなるものである。

2．本調査の経過と概要

本調査は、1996（平成8）年9月2日に機材搬入、重機による表土剝ぎを行ない開始された。なお掘削排土置場は、隣地の休耕田の地主にお願いし、これを借りて利用したが、現状復旧がしやすいようにシートを敷いた上に排土を置いている。9月3・4日にかけては、調査区周囲のフェンス設営などの条件整備と、調査区内は水はけが悪く湧水が部分的にあるので、周囲に側溝を切ることに作業がほとんど費やされた。9月5日より遺構検出を開始している。対象地は、周囲が水田であることもあり、一段下がった調査区は非常に水はけが悪く、少々の雨天でも水浸しとなり、排水作業が予想外に困難であった。さらに、地表下の耕作土やその下部の客土が脆く、崩れやすい土であったため、たびたび調査区壁が崩落してしまった。道路用地の拡幅幅分の調査であるため、重機による掘削がどうしても縦方向にしか行なえず、調査区壁面にうまく法面をつけることができなかったためもあるが、このあたり今後対策が必要であろうか。このような事情で、調査面積と遺構の密度のわりには調査作業に手間がかかり、予定期間いっぱいで調査を終了することになっている。なお、調査区壁面の崩落はある程度は予測しており、そのため特に西側の水田との境界の間には一定の‘逃げ’を設けたため、工事予定部分いっぱいには調査できていないことを付言しておく（Fig.6）。9月18・19日にかけては全体の精査を行ない、全景写真を撮影した。9月23～26日は、残りの掘削作業と図面の作成、個別写真の撮影を行なっている。9月27日には機材を撤収・搬出し、埋め戻しを開始した。そして9月30日には、埋め戻しを完了し、排土置場となっていた隣地の休耕田の現状復旧を行ない、全ての作業を完了して調査は終了した。

遺構は地表下60～90cmのところで検出された。調査区の土層は表層に現在の水田耕作土層があり、その下に客土層、以下は酸化鉄分・マンガンの沈殿が交互に見られる水田層が何枚かあり、地表下50～80cmのところで暗褐色の包含層となる（Fig.4）。遺構はこの下面の灰白色～灰黄色のシルト地山面で検出された。検出された遺構は（Fig.5）、水路や集落内の区画と考えられる溝状遺構が10条前後あるほか、土坑、柱穴、杭列、水田跡、池上の落ち込みなどがある。柱穴の一部は掘立柱建物を構成する可能性がある。特に、溝、杭列、池状落ち込み等は水田経営に関連する遺構である。遺構の覆土は、暗灰色から黒褐色のシルトないし粘質土で、また地山シルトが崩れた細砂を含む。遺構群の時期は、中世後期（15～16世紀）が主体のようである。なお遺構検出面のレベルは、調査区の北側と南側でそう変わらないが、約10cmほど南側が低い地形になっている。遺物は、主に溝状遺構（特にSD04）から出土した。中世の土器・陶磁器類が主体で、若干の木製品・石製品がある。また、遺構検出時と排水用の側溝掘削中にも遺物が若干出土しており、包含層出土として末尾に報告する。出土遺物の総量は、パンケース4箱分に相当する。以下、検出された遺構と遺物について説明して行きたい。

3．検出された遺構

（1）溝状遺構（SD）および溜井状遺構（SX05）

・SD04およびSX05（Fig.5・7・8、PL.2-5～7）

SD04は調査区の中央から北側にかけて検出された。確認された総延長は約26mであるが、調査区

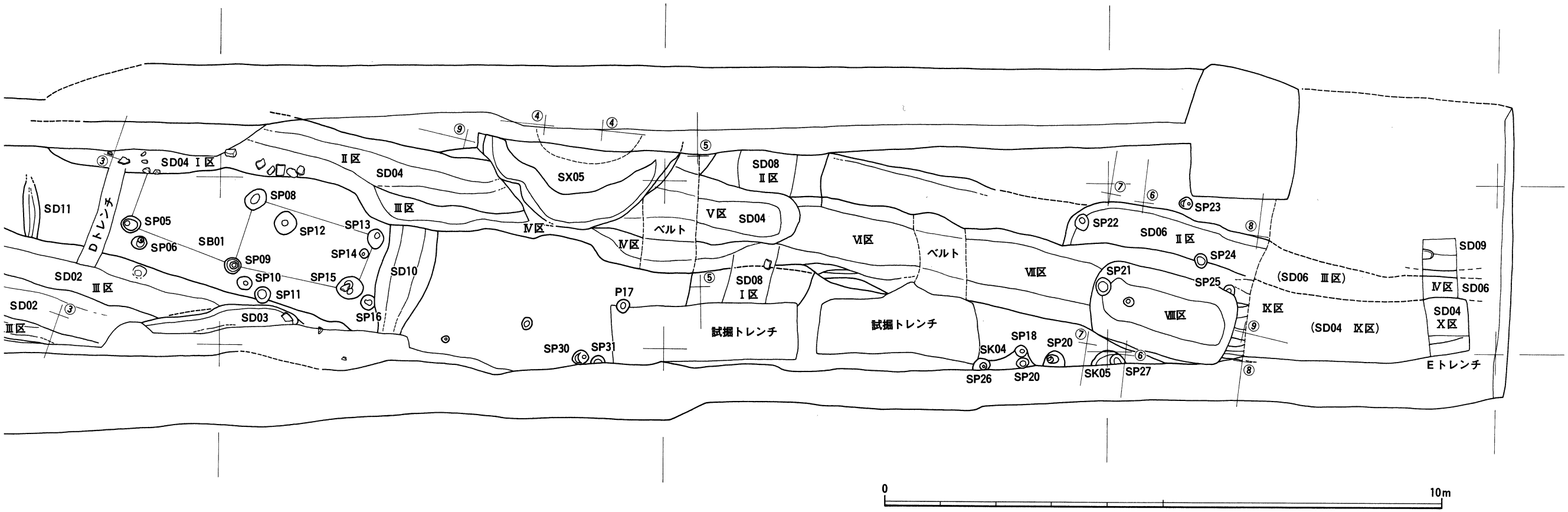


Fig.5 調査区全体図 (1/80)

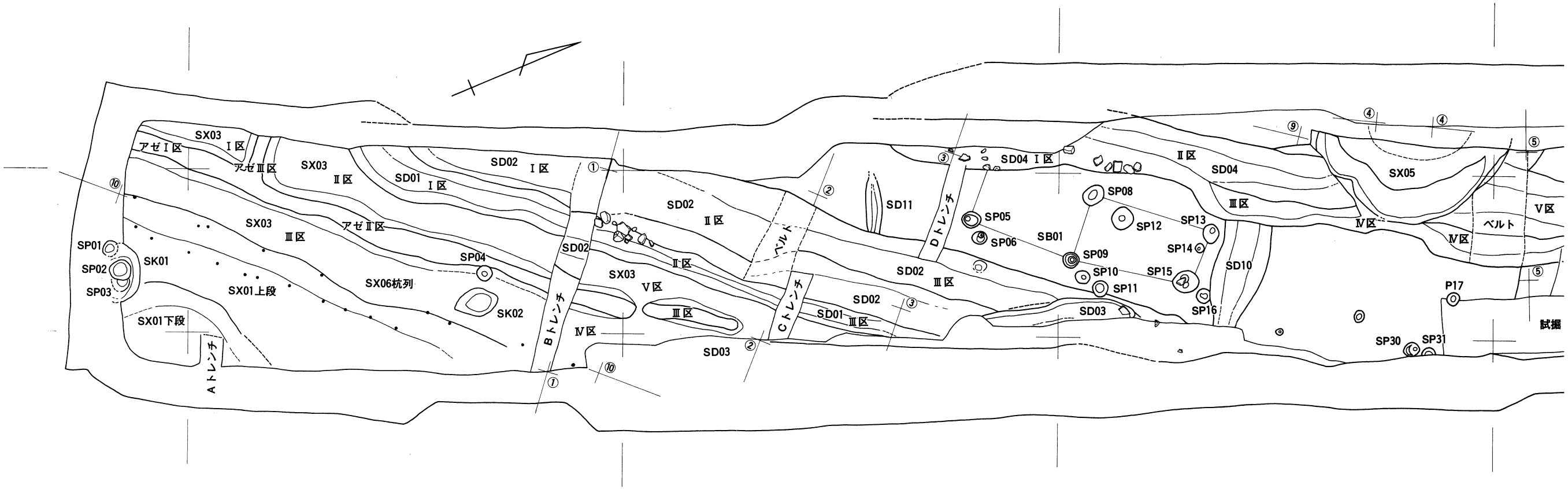


Fig.5 調査区全体図 (1/80)

の外にさらに延びるようである。上面幅は、1.2～2.5m、深さは20～60cmを測る。また方位は、N（磁北、以下同じ）－32°－E前後を測る。溝は、場所によって上面幅が変わる。途中にベルトを設け発掘区を分けて調査したが（Ⅰ～Ⅹ区）、発掘区によって底面の深さが異なり、段状の高低差がある（Fig. 8）。細長い土坑が連続したような溝である。総じて見れば南に低くなるようであるが、一部逆転している。SD10、SD08を切る。SD06は、重複ではなくあるいは同一の溝の上の段である可能性もある。SX05とは重複関係にあるのか、同時期にあったものなのか判断に苦しむ。しかし、ちょうどSD04のⅣ・Ⅴ区が西

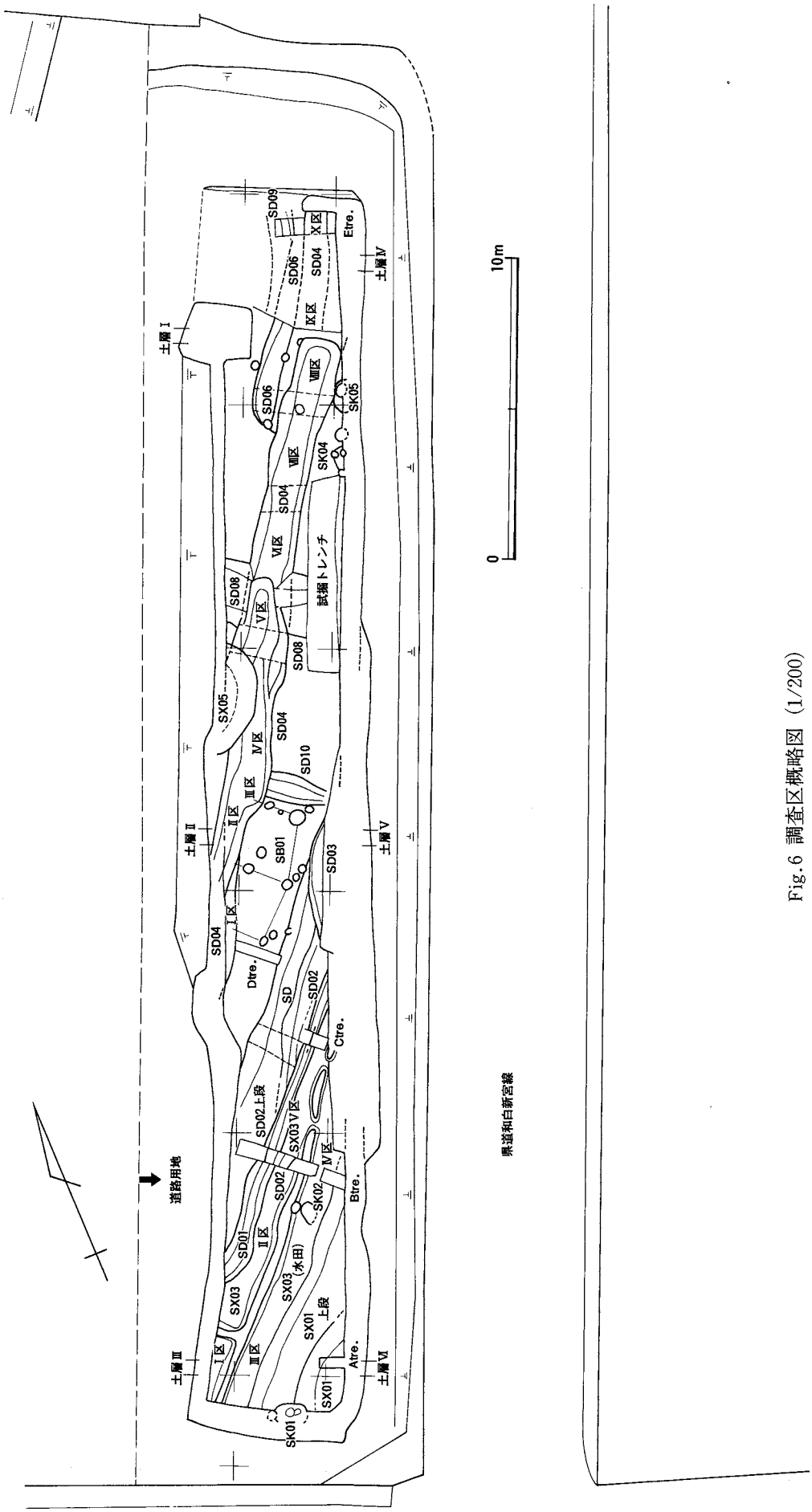
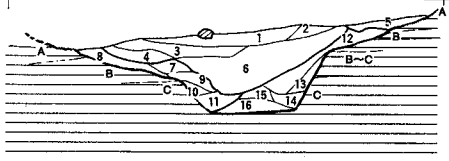


Fig. 6 調査区概略図（1/200）

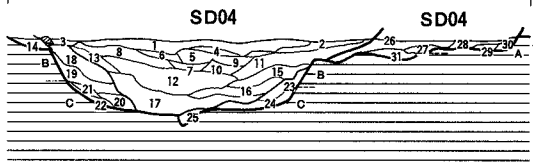
⑤ (E) SD04Ⅴ区南側土層　(W) ⑤ 2,000m



A．浅黄～灰白色砂質シルト、しまりあり、鉄分若干沈殿
B．灰白色砂質シルト
C．明灰～灰白色砂質シルト

SD04 Ⅴ区南側土層⑤
1．オリーブ黒色～暗灰色砂質シルト、有機物・炭化物粒子含む、灰白色細砂若干含む、レキあり
2．オリーブ黒色シルト
3．オリーブ黒色シルト＋灰白色細砂
4．黒褐色やや粘質シルト、灰白色細砂少し含む、炭化物粒少し含む
5．暗灰～灰色シルト、やや砂質、鉄分若干あり
6．オリーブ黒色～黒色粘質シルト（粘土質）
7．オリーブ黒色やや粘質シルト、灰白色細砂含む
8．オリーブ黒色粘質シルト、炭化物粒子あり
9．オリーブ黒色シルト、灰白色細砂わずかあり
10．暗灰～オリーブ黒色砂質シルト、灰白～明灰色細砂少し
11．オリーブ黒色～黒色粘質シルト、灰白色細砂わずかあり、小レキあり、有機物粒子あり
12．オリーブ黒色～暗灰色粘質気味シルト、しまりややあり、灰白色細砂若干あり
13．オリーブ黒色～暗灰色やや砂気シルト
14．オリーブ黒色シルト＋灰白～浅灰黄色細砂多く含む
15．黒色粘質シルト（粘土質）
16．暗灰色～オリーブ黒色砂質シルト＋15層＋灰白色細砂少し

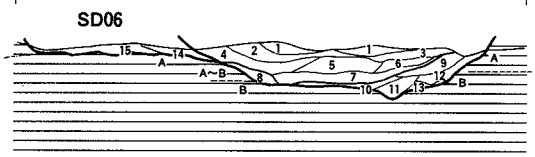
⑥ (E) SD04Ⅷ区南側土層　(W) ⑥ 1,800m



21．暗灰～灰色砂質シルト＋明灰色細砂
22．オリーブ黒色砂質シルト＋明灰～灰白色シルト、砂まじり
23．灰オリーブ色砂＋灰白色砂質シルト、オリーブ黒色シルト少しまじる
24．22層と同じ
25．オリーブ黒色～黒色やや粘質のシルト、灰白色シルト砂まじる
26．暗黄灰（暗灰）～オリーブ黒色やや砂質のシルト、鉄分沈殿若干
27．暗灰色シルト、鉄分少し沈殿
28．暗灰～灰色砂質シルト、鉄分少し沈殿
29．暗灰色シルト
30．29層＋明灰色細砂＋明灰黄色シルトブロック
31．暗灰色シルト＋明灰黄色シルトブロック（細砂質）
A．⑤のAと同じ
B．灰白～明灰黄色砂質シルト、しまりややあり
C．灰白色やや粘質シルト、しまりややあり、やや青味ある色

SD04Ⅷ区南側土層⑥
1．黄灰～灰色（やや）砂質のシルト、鉄分沈殿あり
2．暗灰色砂質シルト＋黄色砂粒子若干、鉄分あり
3．1層と同じ
4．暗灰色（やや）砂質シルト、鉄分沈殿
5．暗灰～黒褐色（やや）粘質シルト、しまりあり
6．5層＋明黄灰（明灰）色細砂多くまじる
7．黒褐色粘質気味シルト
8．暗灰色（やや）砂質シルト＋明灰色細砂
9．暗黄灰（暗灰）色シルト＋明黄灰（明灰）細砂＋レキ若干、やや粘質
10．オリーブ黒色～黒色、粘質シルト＋灰白～明灰色細砂
11．オリーブ黒色やや粘質シルト、炭化物粒子含む
12．オリーブ黒色～黒色粘質シルト＋灰色やや粘質シルト＋灰白色細砂、しまりややあり
13．オリーブ黒色やや粘質シルト＋明灰色細砂少し、炭化物粒子あり
14．明灰色細砂＋灰白色砂
15．オリーブ黒色粘質シルト＋明灰～明灰黄色細砂
16．オリーブ黒色～黒褐色やや粘質シルト＋灰白色細砂、有機物含む
17．オリーブ黒色～黒色粘質シルト、灰白色細砂少しあり、有機物少し含む
18．黒褐色～暗灰色シルト＋明灰～灰黄色細砂まじり
19．暗灰色砂質シルト、灰色～明灰色細砂あり、炭化物少し含む
20．オリーブ黒色粘質シルト

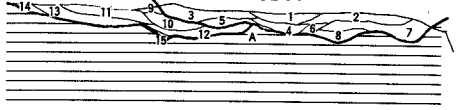
⑦ (W) SD04Ⅶ区北側土層　(E) ⑦ 1,800m



14．黒褐色～暗黄灰（暗灰）色シルト、しまりあり、灰白色シルトブロック含む、鉄分沈殿あり
15．オリーブ黒色シルト、灰白色砂質シルトブロック少し含む
A．灰白色～明灰黄色砂質シルト、地山、しまりあり、鉄分若干沈殿
B．灰白色シルト、やや粘質、しまりややあり、やや青味ある色

SD04Ⅶ区北側土層⑦
1．灰～暗黄灰色砂質シルト、しまりあり、鉄分沈殿、炭化物粒子あり
2．灰～黄灰色シルト、しまりあり、鉄分沈殿多い、炭化物粒子あり
3．灰～黄灰色シルト、しまりあり、鉄分沈殿少し、炭化物粒子あり
4．オリーブ黒色～暗灰色やや粘質シルト、しまりあり、明灰黄色細砂少し含む、鉄分若干
5．オリーブ黒色～黒色やや粘質シルト、灰白色細砂少し含む、しまりあり
6．黒褐色～暗黄灰色砂質シルト、灰白色細砂微量含む、しまりあり
7．オリーブ黒色～黒色粘質シルト、しまりややあり、有機物含む
8．黒褐色シルト＋灰白色細砂
9．暗黄灰（暗灰）色砂質シルト～細砂＋黒褐色シルト、明灰色細砂まじり
10．黒褐色～黒色粘質シルト、⑥の16層と同じ、有機物、木片含む、灰白色細砂あり
11．黒褐色粘質シルト、（湧水する）、粘土質、有機物わずか
12．黒褐色砂質シルトに明灰色細砂、灰色シルトまじり、有機物・炭化粒あり
13．暗灰～オリーブ黒色シルト、灰白色細砂シルトブロック含む

⑧ (W) SD04Ⅷ区北側土層　(E) ⑧ 2,000m



11．灰白～明灰色細砂＋暗灰色シルト
12．黒褐色～オリーブ黒色やや粘質シルト、炭化物粒子若干、灰白色細砂少し
13．黒褐色シルト＋灰白色細砂少し
14．明灰～黄灰砂質シルト＋灰白色砂若干、鉄分・マンガン若干沈殿
15．暗灰～黄灰色砂質シルト（細砂）
A．灰白～明灰黄色砂質シルト

SD04Ⅷ区北側土層⑧
1．黄灰～暗灰色砂質シルト、明黄褐色シルト粒子、炭化物粒子、焼土粒子含む
2．黒褐色シルト、若干粘質気味、鉄分・マンガン少量沈殿、灰白色細砂含む
3．黄灰（灰）色砂質シルト、明黄褐色シルト粒子、炭化物粒子あり、灰白色細砂あり
4．暗黄灰色シルト、やや粘質、炭化物粒子含む
5．暗黄灰シルト＋灰白色細砂多くまじる
6．灰色～明黄灰色細砂＋灰白色細砂＋焼土粒子わずか含む
7．灰白色～明黄灰色細砂、ややしまりあり
8．明黄灰～灰白細砂＋灰黄色シルトブロック
9．明灰（明黄灰）色砂質シルト、鉄分あり
10．暗灰～黒褐色シルト、土器片・炭化物粒子含む、灰白色細砂若干

Fig. 7　SD04土層断面図(S＝1/40)　※⑤～⑧はFig.5参照

のⅥ区から急に深くなる先にSX05があるという位置関係にあり（Fig. 8）、覆土も同一であるので、SD04に接続する遺構であった可能性を考えたい。溝の底面は、レベルが低いⅠ～Ⅴ区やⅧ区では湧水が多く、あるいは自然の湧水を利用した溜井的な用水路であったことも考えられる。ただし、溝の覆土は主として暗褐色～黒褐色の粘質土であり（Fig. 7）、砂の堆積は下層に若干あるのみで、顕著な流水はなかった模様である。また土層断面の検討では、層位の不整合が一部にあるので、若干の溝浚えや掘り直しも想定できよう（Fig. 7）。なおSD04からは、総量は少ないが、中世の土器・陶磁器を若干と、わずかに石製品・木製品が出土した。SX05は、調査区中央で検出した（Fig. 5、PL.2-5）。上面径1m弱、深さ（推定）80cm前後の遺構である。SD04との関係は上述の通りである（Fig. 8参照）。覆土はSD04と同様、暗褐色～黒褐色の粘質土であるが、下層は礫を含む（Fig. 9下）。推定半分以上が調査区外になるが、西側の調査区壁面の崩落と湧水により、危険であることと時間の都合で底面まで掘り下げていない。底面のレベルは、ピンポールを突き刺したことによる推定である。ピンポールによる探査では、掘削できなかった下層は、拳大程度の礫が広がる層がまずあるようであり、その下も少ないが礫が含まれると推定される。湧水が顕著であるが、この遺構の性格として、自然の湧水を利用した溜井的な潅漑施設である可能性を考えたい。SD04がこれに接続するとすれば、ここにたまった水を流すのが溝の機能の一部ということになるかもしれない。遺物は、土器・陶磁器の破片を少量と、木製品をわずかに出土した。

・SD02（Fig. 5・9）

調査区南半で検出した。確認された総延長は約14mである。東側の立ち上がりが重複で不明であるが、上面幅は本来4m近くになるであろう。深さは0.4～0.5mを測るが、溝の中央部が幅0.6mほど段状に深くなっている。溝の東側は、SD02の埋没後SX03（水田）がのり、SD01・03がさらにこれを切る。調査区南部では、溝の覆土の上全体にSX03（水田）がのっている。溝の覆土は（Fig. 9）、暗褐色～暗灰色シルトと地山シルト起源の灰白色細砂が主である。SD04の覆土と比較すると、砂質シルト・砂が目立つので、断面形・立ち上がりの状況からすると、あるいは流路ないし小河道の可能性もある。なお溝の底面は調査区内では北側の方が若干低い。溝の方位は、N－34°－E前後で、SD04と類似する。後述するように、出土遺物も時期がほぼ同じなので、二つの溝は共存した可能性が高い。出土遺物はきわめて少なく、中世後期の土器類がごくわずかに出土した。

・その他の溝（Fig. 5）

SD01は調査区南側で検出した。確認された総延長は11m、上面幅0.4～0.8m、深さ数cmから15cmの浅く細い溝である。本来より上位に遺構検出面を設けるべきであったものと思われ、削平を受けた結果であろう。SX03（水田）より新しい。周囲の土は灰色の砂質シルトであるが、溝の覆土はやや暗く褐色がかった灰褐色シルトである。溝は調査区南西端では

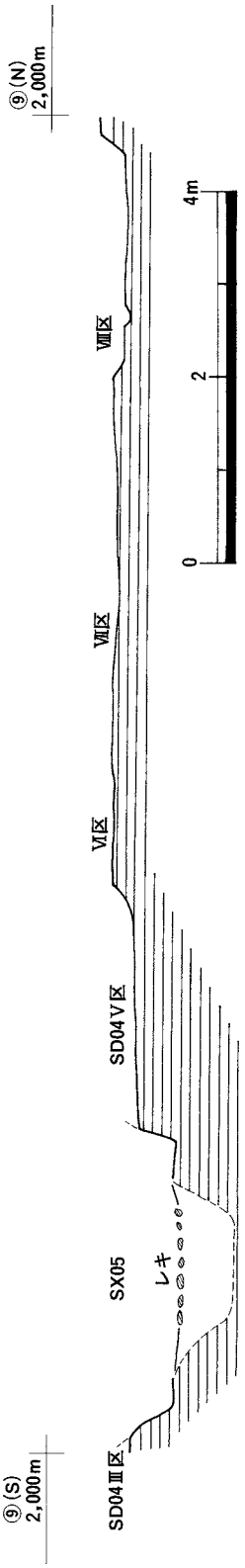
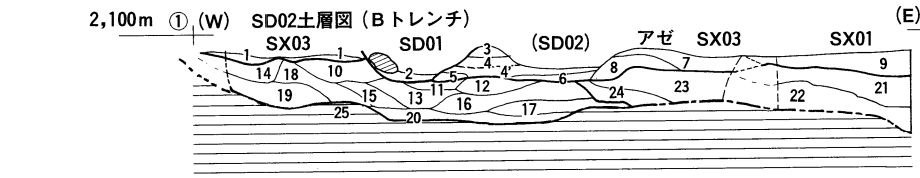
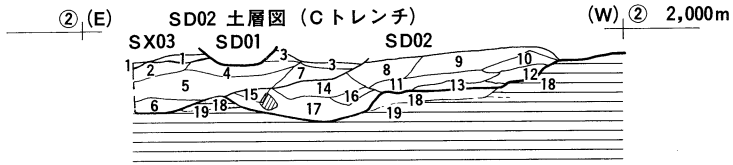


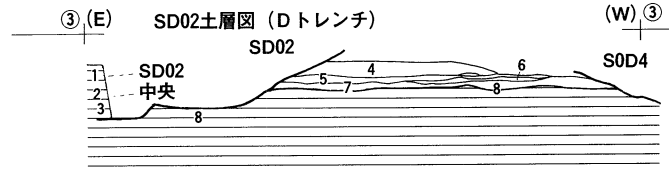
Fig. 8 SD04・SX05 縦断面図 (S=1/80)



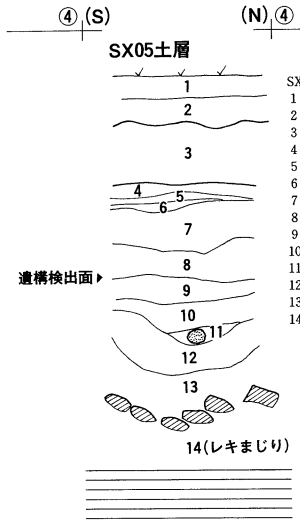
SD02（Bトレンチ）土層①
1．暗灰色砂質シルト、鉄分沈殿（水田）
2．暗黄灰色砂質シルト＋にぶい黄褐色砂質シルト、レキあり、鉄分沈殿
3．にぶい黄色砂＋黄灰（灰）色シルト若干、鉄分沈殿、しまりあり
4．暗灰～黄灰色砂質シルト、鉄分沈殿、しまりあり、にぶい黄色砂まじる
5．２層に似るが、鉄分少なく、しまり強い
6．黄灰（灰）色シルト＋黄褐色砂まじる、鉄分・マンガンあり
7．灰黄～明黄灰色シルト、しまりあり、鉄分沈殿、黄灰砂まじり
8．浅黄色砂質シルト＋明黄灰色シルト、しまりあり、鉄分多い
9．明黄灰砂質シルト、しまりややあり、炭化物含む、灰黄色砂まじる
10．暗灰色～オリーブ黒色シルト、しまりあり、鉄分沈殿あり、黄褐色砂含む
11．暗灰色シルト＋黄灰シルト＋オリーブ褐色砂、マンガン沈殿若干
12．暗灰～暗黄灰砂質シルト、黄褐色砂まじり、鉄分若干
13．暗灰色シルト＋黄褐色砂ブロック、炭化物あり、鉄分若干
14．灰色砂質シルト＋灰オリーブ砂質シルトブロックまじり、鉄分沈殿多い
15．灰色シルト＋黄褐色砂
16．暗黄灰色砂質シルト＋黄褐色砂ブロックまじり、しまり甘い
17．暗黄灰色粘質シルト
18．オリーブ黒色シルト＋黄灰色砂ブロックまじり
19．オリーブ黒色シルト＋明灰色細砂まじり
20．灰色＋灰オリーブ色砂質シルト、（細砂）、しまり甘い、木質物あり
21．灰色シルト＋明黄灰シルト（砂質）、鉄分あり
22．暗灰色シルト、明灰色細砂まじり、鉄分あり、しまりあり
23．黄灰（灰）色シルト＋浅黄色砂ブロックあり、鉄分・マンガンあり、しまりあり
24．暗黄灰色シルト、マンガン沈殿
25．灰色～青白色やや粘質シルト土、湧水あり、しまりあり（地山）



SD02（Cトレンチ）土層②
1．灰白～明黄灰色砂質シルト（細砂）しまりあり、一部２層まじる、鉄分沈殿
2．黒褐色～オリーブ黒色シルト
3．上半鉄分沈殿、灰色砂質シルト
4．黒褐色砂質シルト、鉄分沈殿若干、灰白色細砂少しまじる
5．黒褐色シルト、やや粘質、灰白色細砂わずかにまじる
6．明灰色細砂＋黒灰褐色砂質シルト
7．暗灰～オリーブ黒色シルト
8．オリーブ黒色シルト、しまりあり、鉄分上半沈殿、灰白色細砂わずかまじる
9．黒褐色砂質シルト＋明黄灰色砂
10．オリーブ黒色砂質シルト、灰色細砂まじり
11．オリーブ黒色シルト＋明灰色細砂わずか
12．黒褐色砂質シルト＋明黄灰色細砂わずか
13．明灰～灰白色細砂＋灰色砂質シルトの互層、炭化物微量あり
14．オリーブ黒色シルト＋明灰色細砂わずか
15．灰白～明灰色細砂
16．オリーブ黒色～黒色シルト、やや粘質
17．オリーブ黒色（黒褐色）シルト、＋灰色～灰白色細砂若干
18．灰白色細砂・砂＋明黄灰色砂、（砂質シルト）、一部炭化物含む地山
19．地山、灰白～灰黄色砂質気味、やや粘質シルト、しまりあり



SD02（Dトレンチ）土層③
1．灰色砂質シルト
2．オリーブ黒色～暗灰色シルト
3．オリーブ黒色やや粘質シルト＋灰色砂質シルト
4．灰白色砂
5．炭化物・有機物粒子多く含む層（灰色砂）
6．灰色粘質シルト、炭化物粒子含む
7．灰白色～明灰色細砂
8．灰白色～明灰黄色砂質シルト、しまりややあり（4～8 地山）



SX05土層④
1．現水田耕作土、黒褐色～暗黄灰色土
2．現水田床土、鉄分沈殿あり、暗灰黄色土
3．客土、灰～黄灰色砂質シルト土、鉄分～マンガン沈殿
4．灰～暗灰色砂質シルト土、（水田？）
5．灰色砂質シルトと灰白色砂の互層、鉄分沈殿
6．暗灰黄色砂質シルト土、灰白色砂
7．黒褐色やや粘質シルト、砂まじり若干、炭化物若干
8．暗黄灰～黒褐色粘質土、灰色砂まじり若干
9．暗黄灰～暗灰・黒灰色砂質シルト土、灰白砂まじり若干
10．黒褐色粘質シルト、暗灰色砂質シルト・灰白色砂若干まじる
11．灰白色砂の間層、流木あり
12．黒褐色粘質土（砂質シルト若干まじる）
13．オリーブ黒色、砂質シルト、粘質シルト＋灰白色細砂若干まじる
14．13層と同じだが、上面にレキ多数、層内にもレキを多く含む

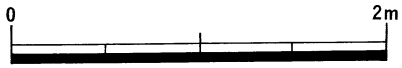


Fig.9 SD-02・SX05　土層断面図（S=1/40）
※①～④はFig.5参照

西に曲がるとみられ、北側はSD03に続き途切れるとみられる。遺物は出土していない。SD03はごく浅く検出できた溝であり、状況的にSD01と類似し、本来同一の溝であろう。SD01・03は、蛇行しつつ略南北に走行する小溝である。

SD10は調査区中央で検出した。SD04と直交する位置にある。SD04に切られていると判断したが、その関係は微妙である。南側のSB01との関係も示唆される（Fig.10）、深さ10cm程度しか残らない。覆土はシルト土である。

SD08は調査区北部で検出した。SD04に直交する形であるが、切り合いは不明で（SD04が新しい？）、接続している可能性もあるか。覆土は暗灰色の粘質シルトで、SD04の覆土に近い。上面幅が約２ｍ、深さは10～20cmしか残らない。土師器の坏が出土した。

SD06は、調査区北部で検出し、SD04と重複し並行するごく浅い溝であるが、SD04の上部の段の可能性が高い

SD09は、調査区北端で検出した。この部分は、排土置場へのスロープとしたので、上面確認と、一部トレンチによる掘削にとどまる。SD06またはSD04に切られる細い溝であるが、重複し並行しており、この方位に何らかの意味があるかもしれない。覆土はSD04と同様の黒褐色粘質土である。

（２）掘立柱建物（SB）

・SB01（Fig.10、PL.1-4）

調査区中央で検出した柱穴群からなる。各柱穴とも柱痕は残っていなかったが、礫の落ち込みがあるのは、柱の裏込めか。西側をSD04に切られるように見られるが、SD04肩部で礫の並ぶ部分があり、これが上記の裏込めとすれば、切り合いは逆となり、柱穴をとばしたかもしれない（SP05の西の柱

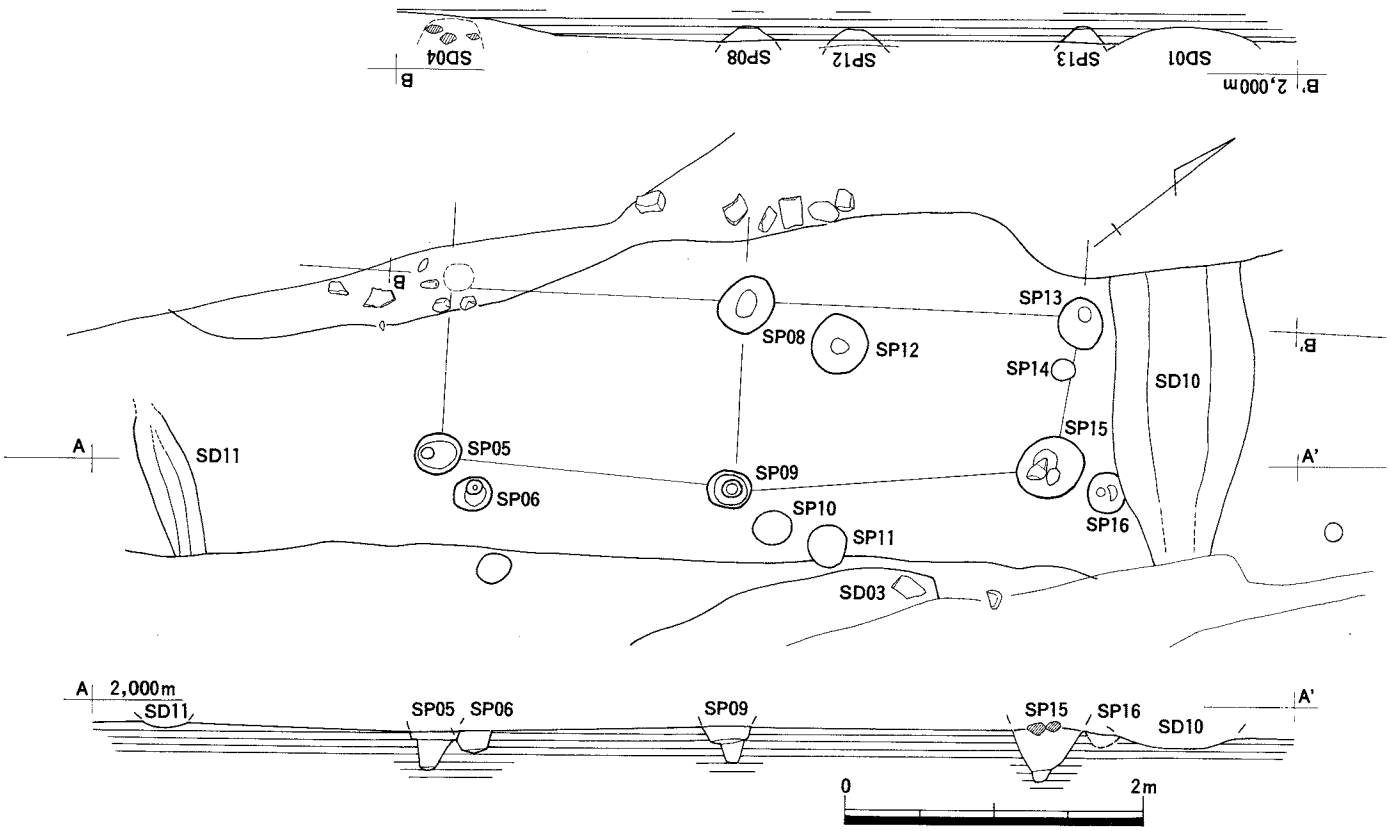


Fig.10 SB-01平面図・断面図（S＝1/50）

穴想定箇所)。2間×1間以上で、梁間1間が1.6m前後、桁行1間は2.5m前後である。方位はN－41°－E前後である。SD04より新しいとすれば、16世紀頃か。ただし遺物を出土していないので断定できない。SD10・11は、この建物を区画する溝の可能性がある。

（3）水田

・SX03（Fig.5、PL.1-3）

調査区南側で検出した。検出時、鉄分の沈殿を認める帯状の遺構を見いだしたので、これを左右に広げたところ、畦畔となり、裾部に不明瞭ながら灰白色細砂のたまる足跡等が見出されたので水田とした。土層断面の精査では、灰色の砂質シルトの下面に鉄分の沈殿が見られた（Fig.9）。水田を覆う土砂は砂というよりシルト質である。畦畔は、主に盛土によっているものと見られる。確認された畦畔の高さは、高い所で15cm前後、裾の幅は50～70cmである。検出された畦畔は、調査区南端で一部西へ派生するが、他はN－40°－E前後の方位で、他の溝等の主要遺構と類似する。水田は、重複関係としてはSD02の埋没後の経営であり、SD01・03に切られる。また、調査区南東端の落ち込みSX01に切られる形となり、杭列SX06よりも古いと見られる。これらから、水田SX03は、中世末期（16世紀）前後の水田であろう。

（4）その他の遺構

・SX01（Fig.5）

調査区南東隅で検出した自然のゆるい落ち込みである。SX03（水田）を切る形となる。灰色砂質シルトないし、灰白色砂が堆積する。このゆるい落ち込みは調査区外に続くが、おそらく旧河川の肩部であろう。現在の和白川は、改修されて調査区東の県道の東側を北から南に流れる小さな川であるが、SX01は近代以前のある時期の流路を示すものであろうか。なお次の杭列SX06は、このSX01の端に沿っており、護岸等の施設であろうか。なお水位が高く湧水がある。

・SX06杭列（Fig.5・11、PL.1-3）

調査区南東隅で検出した杭列である。2列あるが、西側の列の方が残りも良く杭材も太い傾向にある。杭材のほとんどは広葉樹材で、先端を鋭利に尖らせ

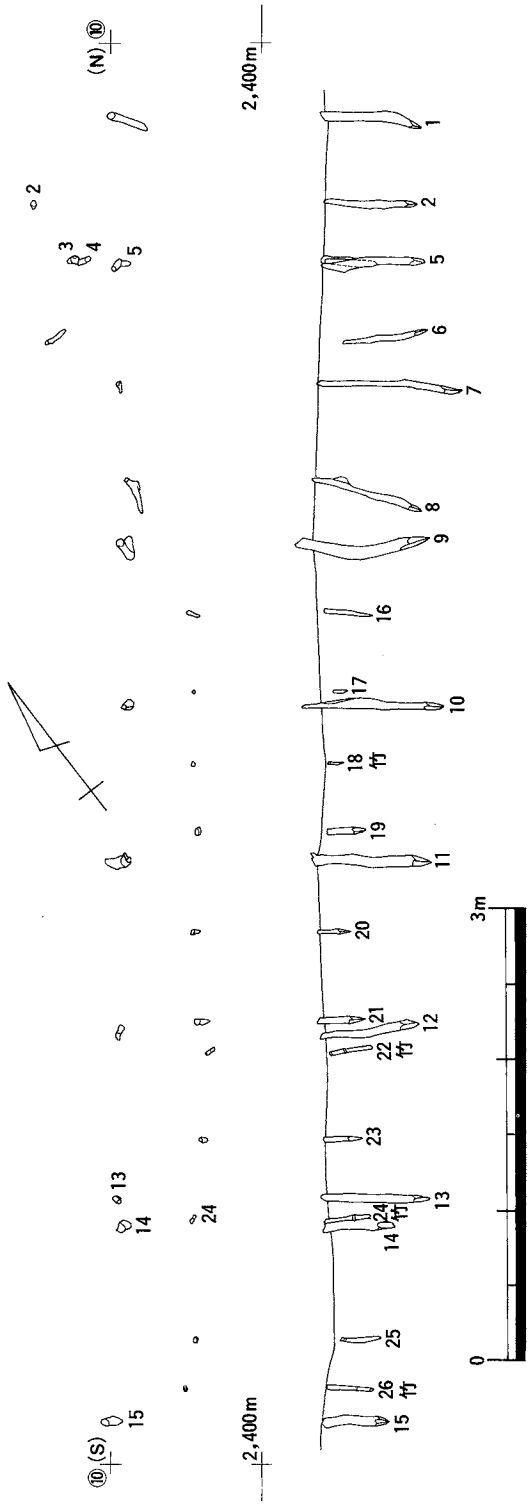


Fig.11 杭列SX-06実測図（S=1/50）

たものだが、一部に竹材がある。西列の杭の間隔は1.1m前後の規則性があるが、東列は不規則である。両列は並行し、約0.5mの幅である。方位はN－38°－E前後である。杭列の時期は、SD02より新しいSX03（水田）よりさらに新しいことから、近世になるか。上述のように、SX01と有機的に関連する遺構と思われる。

・その他

土坑状の遺構がいくつかあるが（SK01等）、いずれも小さく遺物も出土していないことから、その性格を明らかにすることができない。

4．出土遺物

（1）遺構出土遺物

・SD04出土土器・陶磁器（Fig.12·13－1～16）

1は瓦質の擂鉢である（PL.2-13·14左）。SD04Ⅴ区下層出土。口径28.9cm、最大径29.8cm、残存高8.9cm。色調は灰褐色。1/8周残存。口縁部内外ヨコナデ、体部外面はヘラ削り、内面は板ナデ。内面に櫛描きのおろし目。口縁の形状は、屈曲して上方に立ち上がるものである。3のような備前焼の擂鉢の口縁部の模倣か。在地系で、14～15世紀のもの。**2**も瓦質の擂鉢。Ⅰ区出土。口径32.4cm。残存高9.8cm。口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内ハケメ後ナデ。櫛描きのおろし目。淡褐色～灰白色。1/5周残存。口縁部は単純な形状である。**3**は備前焼の擂鉢（PL.2-10·11）。口径30.5cm、最大径35.4cm、高さ11.75cmを測る。1/7周残存。口縁部・体部とも回転ヨコナデ、内面に櫛描きのおろし目がある。焼成は堅緻で、色調は外面・断面が橙色、内面は淡灰褐色。口縁部は複合口縁状で、口縁端部はすぼめ丸める。備前焼のⅣ期の内でも前半期の型式と考えられ、14世紀後半～15世紀前半頃のものであろうか。**4**は白磁の高台付きの小皿である。Ⅰ～Ⅱ区出土。高台畳付部を数ケ所削り取っている、いわゆる抉り高台の白磁である。口径10.8cm、高さ2.55cm、底径4.8cm。口縁端部は丸める。内底に目跡あり。**5**も同様に抉り高台の白磁小皿。Ⅰ～Ⅱ区上面検出。口径9.0cm、高さ2.15cm、底径4.0cm。口縁端部は面取り後丸めた感じ。内底に数ケ所の目跡。4・5とも全面施釉で乳白色。4・5ともに15世紀前後の輸入陶磁器。**6**は李朝の粉青沙器青磁小碗（皿）（PL.2-15·16）。Ⅵ区出土。口径8.5cm、高さ3.3cm、底径4.4cm。緑灰色。外面の一部に釉のかからない部分あり。内外底面に砂目状の目跡。15～16世紀頃。**7**は瓦質の深鉢（甕）。Ⅰ～Ⅲ区南出土。口縁部～体部上部と底部の間の資料が欠けているが同一個体。口径37.0cm、最大径39.3cm、底径18.0cm。体部外面はオサエが顕著に残るが、ハケメを施し、若干ナデがある。内面は、ハケメ一部ナデである。口縁部は、外面ヨコナデ、内面ハケメ後ヨコナデである。底部は静止の糸切り。暗灰色の表面である。口縁部の形状や想定される全体のプロポーションは、16世紀後半～17世紀初頭頃の備前焼の甕に類似するか。**8**は瓦質の茶釜形土器（PL.2-8）。Ⅲ～Ⅳ区の上層出土。1/6周残存。口径16.2cm、最大径（突帯部）26.0cm、現存高12.1cm。口縁部は短く直立し、端部は面取り状。体部外面は、ミガキ様のヨコナデ、下部はハケメ後ナデ。内面は横のヘラ削り状の板ナデ。口縁部は、外面ハケメ後ヨコナデ、内面ナデ。体部中位に細く低い突帯。肩部上位に印刻文（Fig.18）。表面は内外とも、いぶし焼きされ黒灰色。**9**も瓦質の茶釜形土器。Ⅴ－Ⅵ区間ベルト中出土。1/6周残存。最大径27.0cm、現存高10.7cm。体部中位に細く低い突帯、上位に把手がある。把手は横に穿孔（紐孔）があり、表面にナナメの刻みがある。外面はみがき様のナデ、内面はオサエ残り、板ナデを施す。内外とも、いぶし焼きされ黒灰色～黒褐色を呈する。外面に煤の付着が顕著である。8・9は、15～16世紀のものであろう。**10**は土師質の茶釜形土器（PL.2-12）。Ⅴ区下層出土。1/3周残存。口径14.6cm、現存高8.0cm、現存最大径24.5cmを測る。体部外面はナデ、頸部直下はヨコハケ。内面は、オサエ残り、ハケメを施す。口縁部は、内外ともヨコハケ一部ヨコナデ。

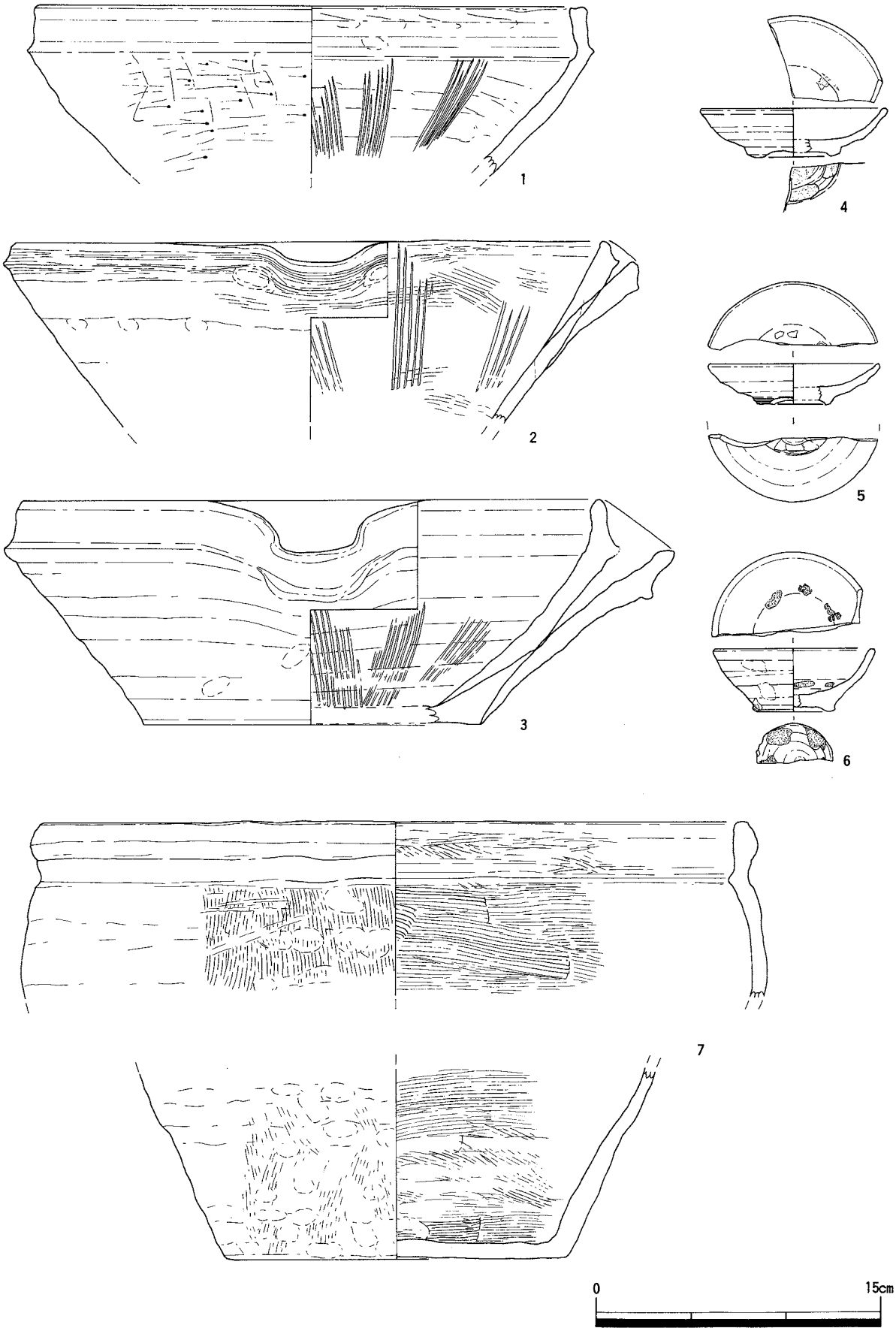


Fig.12 SD04出土土器・陶磁器（S＝1/3）

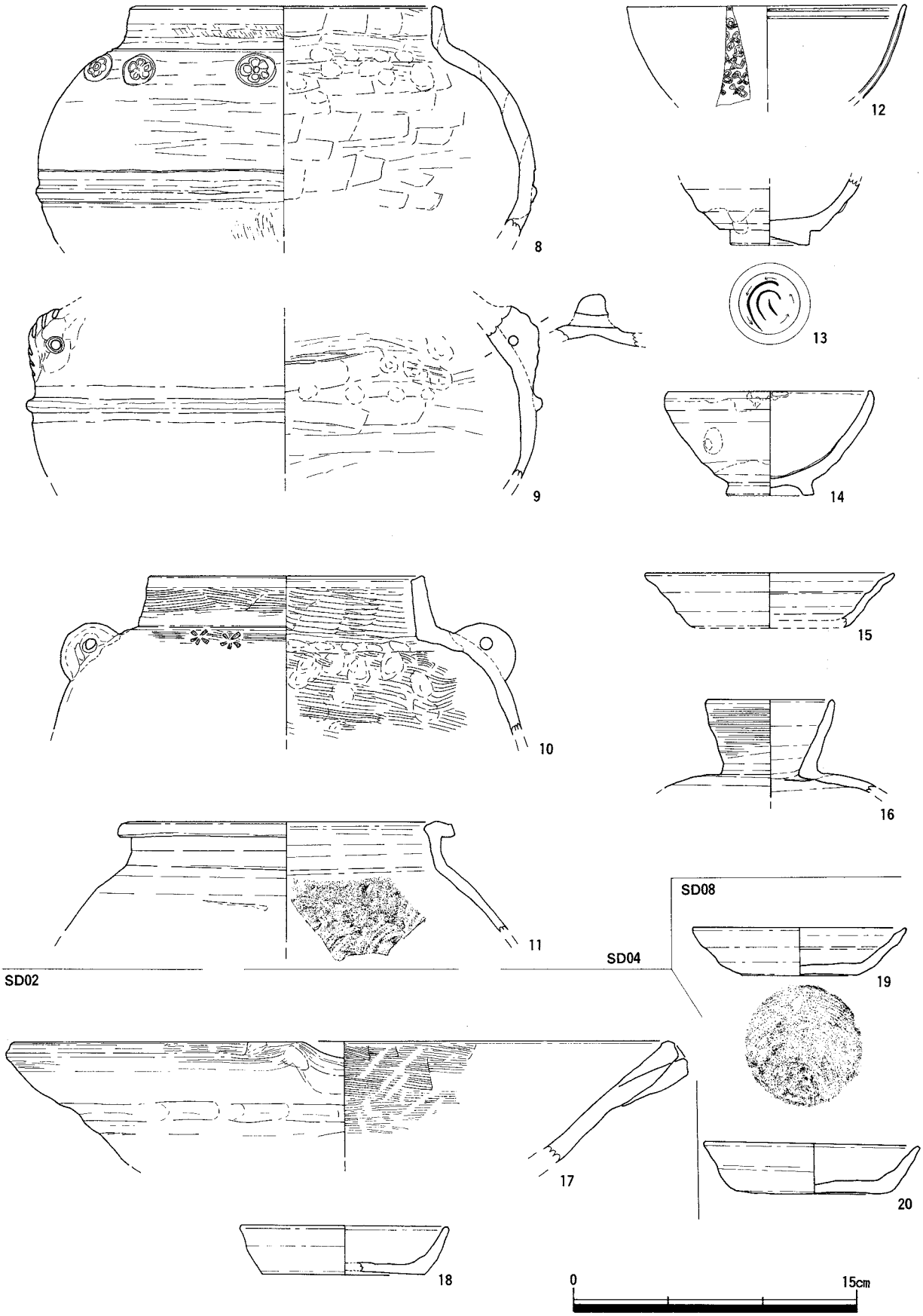


Fig.13 SD04・02・08出土土器・陶磁器（S=1/3）

肩部に把手あり、穿孔（紐孔）あり。肩部上位（頸部直下）に印刻文あり（Fig.18）。外面は黄橙淡褐色、内面は黒色化処理。瓦質の茶釜の模倣品か。**11**はおそらく朝鮮製の施釉陶器。Ⅴ区下層出土。口径17.7㎝、現存高5.7㎝。1/8周残存。外面にぶい黄褐色～暗褐色、内面橙褐色～暗褐色。口縁部は外に突出し、内にも少し出る。外面はナデまたは回転ナデ、内面はタタキの当て具（同心円状）の痕跡があり、ナデ消し。口縁部は内外ヨコナデ。**12**は明の染付碗の小片（PL.2-19）。口径の復元は不正確。口縁端部はすぼめる。施釉はやや厚く、透明で若干青みのある釉。染付文様は、はっきりしない濃青色。口縁外面に一本の横線、内面に二本の平行線。外面の文様は渦文状。**13**は瀬戸・美濃焼系の天目碗（PL.2-17･18）。Ⅲ～Ⅳ区上層出土。底径4.2㎝、現存高3.2㎝。地の胎土はにぶい黄橙色、体部には黒色釉。外面は釉ダレが著しく、内底の釉は薄くなり淡褐色状。外面の調整は回転のヘラ削りのようである。**14**は唐津焼とみられる高台付の碗。Ⅰ～Ⅱ区出土。1/3周残存。口径10.7㎝、高さ5.4㎝、底径（高台部）4.6㎝。茶褐色の胎土の上に緑色の釉があり、さらに白の化粧土が表面にかかる。口縁端部は白の化粧土が無く、体部外面の一部は化粧土が欠ける部分があり、下部～底部はかからない。16－17世紀初頭か。**15**は土師器の坏である。Ⅴ区下層出土。1/6周残存。口径13.2㎝、現存高2.9㎝、推定底径8.4㎝。内外凹凸ある顕著なヨコナデ。器壁が薄い。法量・形態的に15世紀代頃の一類型。**16**は須恵器の提瓶または平瓶の口縁部。Ⅲ～Ⅳ区上層出土。口径6.8㎝。外面にうすいカキメのあるほかは回転ナデ。6世紀後半～7世紀初めのものであるので、混入品。

以上の土器・陶磁器から、SD04は15世紀頃掘削され（下層出土遺物）、最終的な埋没は16世紀後半頃（上層出土遺物）になるものと推定されよう。

・SD02出土土器（Fig.13-17･18）

17は土師質の捏鉢。Ⅱ区出土。1/8周残存。口径35.2㎝、現存高7.9㎝。外面はナデ、口縁部ヨコナデ（工具使用か）。内面は横のハケ。淡黄褐色。**18**は土師器の坏。Ⅱ区出土。口径11.0㎝、高さ2.5㎝、底径8.5㎝。底部糸切り。内外ヨコナデ。法量・形態的に、15～16世紀の一類型であろう。

以上から、資料数が少ないものの、SD02は15～16世紀の時期が考えられ、溝の方位や層位的状況を考慮すれば、SD04と同時期に存続した溝であった可能性が高い。

・SD08出土土器（Fig.13-19･20）

19は土師器の坏。Ⅱ区出土。口径11.2㎝、高さ2.5㎝、底径6.2㎝。底部糸切り。内外ヨコナデ。法量・形態的に、15～16世紀の一類型であろう。**20**も土師器の坏。Ⅱ区出土。口径11.3㎝、高さ2.7㎝、底径8.2㎝。底部糸切り。内外ヨコナデ。法量・形態的に、15～16世紀の一類型であろう。

以上から、資料数が少ないものの、SD08は15～16世紀の時期が考えられる。SD04との切り合いは不明瞭であったので、遺物からは同時期であり、直交して接続する溝であった可能性もある。

・SD04出土石製品（Fig.14-21～22）

21～23・25はいずれも砥石。**24**は凹石であるが、上下辺が微妙に擦れているので石錘としても使用されたか。石材はいずれも砂岩の類。**21**は五角形状の側面全てが使用面。**25**は表裏とも使用しているようだが、図化した面は剝離しており再加工（の途中？）であろうか。

・各遺構出土木製品（Fig.15-26～28）

26はSX05出土の椀の底部。高台を削り出す。高台部底径8.3㎝、現存高2.4㎝。内底中央に五ツ巴状（ヒトデ状）の文様が赤漆？で描かれる。表面が薄く黒褐色をなし、あるいは漆塗りかもしれないが不明である。高台の一部に抉りがある。**27**はSD08出土で、桶状製品の部材。内面下方に底板がはまっていた痕跡があり（若干凹む）、外面に二ケ所タガのはまっていた痕跡がある。下辺が擦れた感じであり、何らかの再利用品か。**28**はSD04Ⅴ区出土。やはり桶状製品の部材と考えられ、外面にタガが

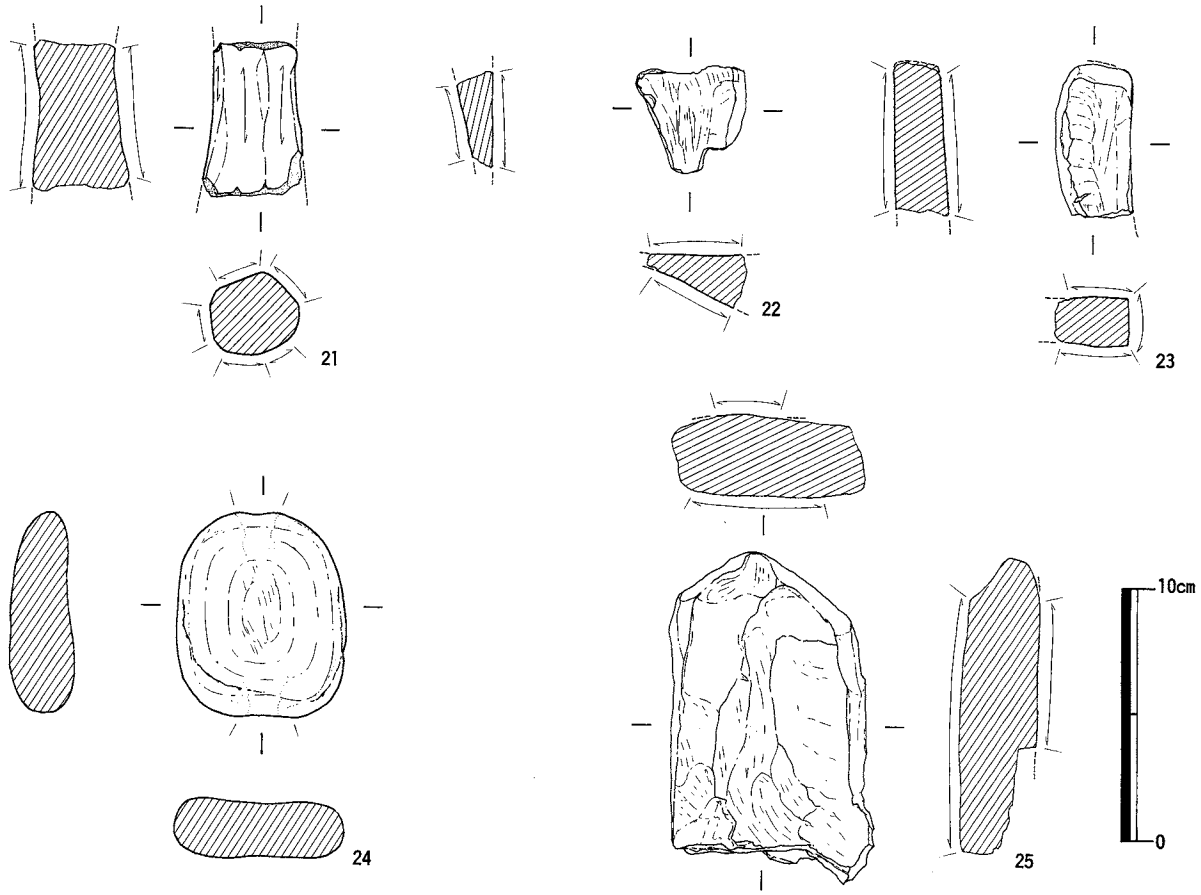
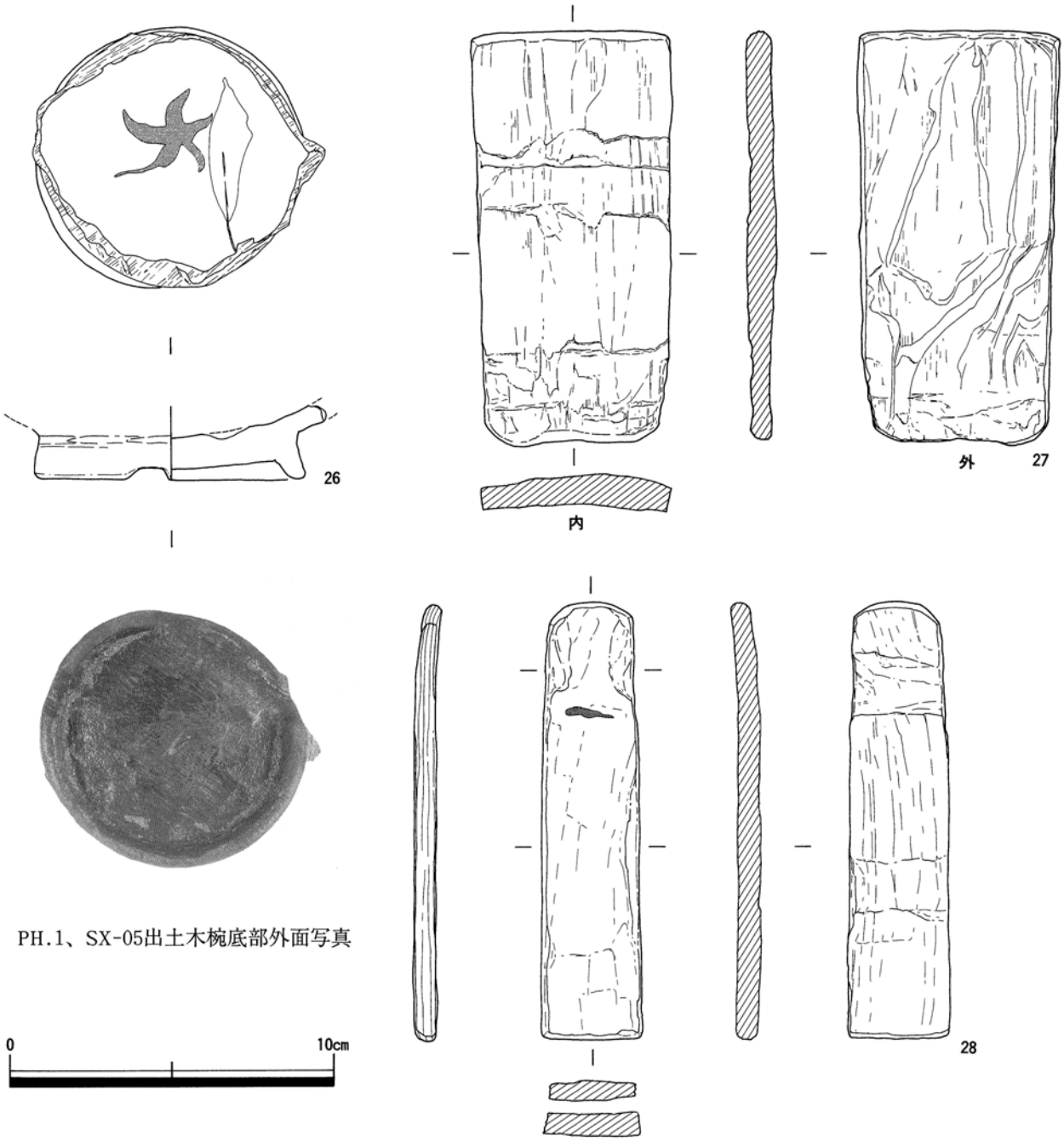


Fig.14 SD04出土石製品（S＝1/3）

はまっていた痕跡が二ケ所ある。しかし内面上方は丸く再加工され、そのやや下方に左右から軽い抉り状の凹みがある。この下に、「一」とも読める横方向の墨書（？字の一画目か）があり、木簡としての再利用が考えられ、全体としてヘラ状の木簡の形に再加工した可能性もある。

（2）遺構検出時他出土（包含層出土他）出土遺物（FIg.16･17－29～43）

遺構検出時および排水用の調査区の側溝掘削中にも若干の遺物が出土した。ここでは表採品等ともあわせて紹介しておく。**29**は瓦質の鍋形土器か。外面煤付着。**30**は備前焼の擂鉢（PL.2-13･14右）。備前焼Ⅳ期の後半期か。**31**は瓦質の茶釜（PL.2-9）。肩部上位に印刻文（Fig.18）。**32**は土師質の茶釜。肩部に、縦三本一組でハケ工具先端が刻まれている（Fig.18）。**33**は瀬戸・美濃焼系（？）の天目碗。地の胎土はにぶい橙色、黒色釉の下地の上に褐色釉。**34**は唐津焼の碗か（PL.2-20）。地の胎土は茶褐色で粗いもの。白色の化粧土（釉）がかかる。外面下方は露胎。**35**は土師器小皿。口径8.5㎝、高さ1.6㎝、底径6.6㎝。糸切り。**36**は中国産とみられる施釉陶器。内面にタタキ当て具痕かすかに残る。紫灰褐色の地に、緑灰色の釉。**37**は龍泉窯系青磁の碗。流れた雷文帯の文様。15世紀前後。**38**は白磁碗Ⅱ類と思われ、とすると12世紀代だが、明代15世紀の白磁にも似た碗があるという教示を受けた。**39**は白磁の碗だが、色調は青白磁に近い。内底に龍？の文様を印刻。14世紀頃か。外底畳付は釉なし。**40**は試掘トレンチ埋土出土の李朝の粉青沙器の碗（皿？）。磁質というより陶器質。白色の象嵌（印刻）文様。**41**は龍泉窯系青磁の碗。内底に圏線と陽刻の蓮華文。外底・畳付は釉なし。**42**は白磁の碗だが、色調は青白磁に近い。外底・畳付は釉なし。内底は同心円状に釉ハギされる。時期は不詳で、明代15～16世紀という教示を受けたが、13世紀頃にも類品があるらしい。**43**は白磁の碗Ⅳ類。12世紀頃のもの。以上、遺構検出時他（包含層他）出土土器・陶磁器は、一部12世紀前後の古いものがあるものの、お



PH.1、SX-05出土木椀底部外面写真

Fig.15 SD04・SX05・SD08出土木製品（S=1/2）

おむね15～16世紀、一部17世紀前半までであり、SD04等の遺構出土遺物の時期とほぼ同じである。これらのうち、やや新しい16世紀後半～17世紀前半の遺物は、水田SX03等のより新しい遺構の時期を示唆するものであろうか。

Ⅳ．まとめ

今回の調査では、周辺調査では資料の乏しい中世後期～近世初頭の資料が得られた。まず、溝状遺構から得られた土器・陶磁器は、15～16世紀の良好な資料であり、この時期の編年研究にも寄与する部分があろう。溝状遺構や水田の検出はこの地域の開発の歴史を語る上で貴重な発見である。溝状遺構や水田畦畔、あるいは建物遺構はその方位が類似しており、何らかの意味があるだろうが、その方位上の規制の由来は今後の周辺の調査によって明らかになるだろう。また、時期的に新しいものであ

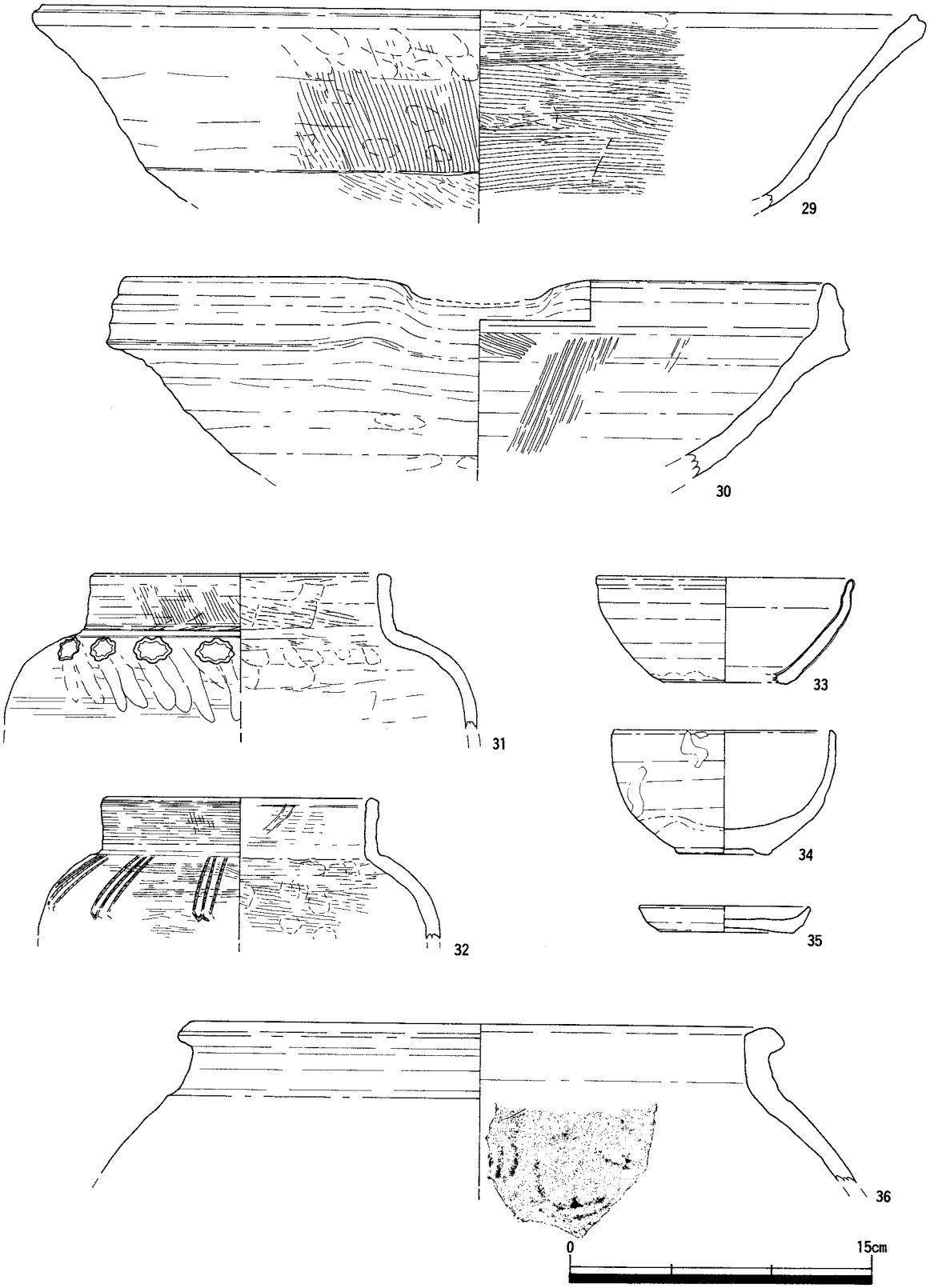
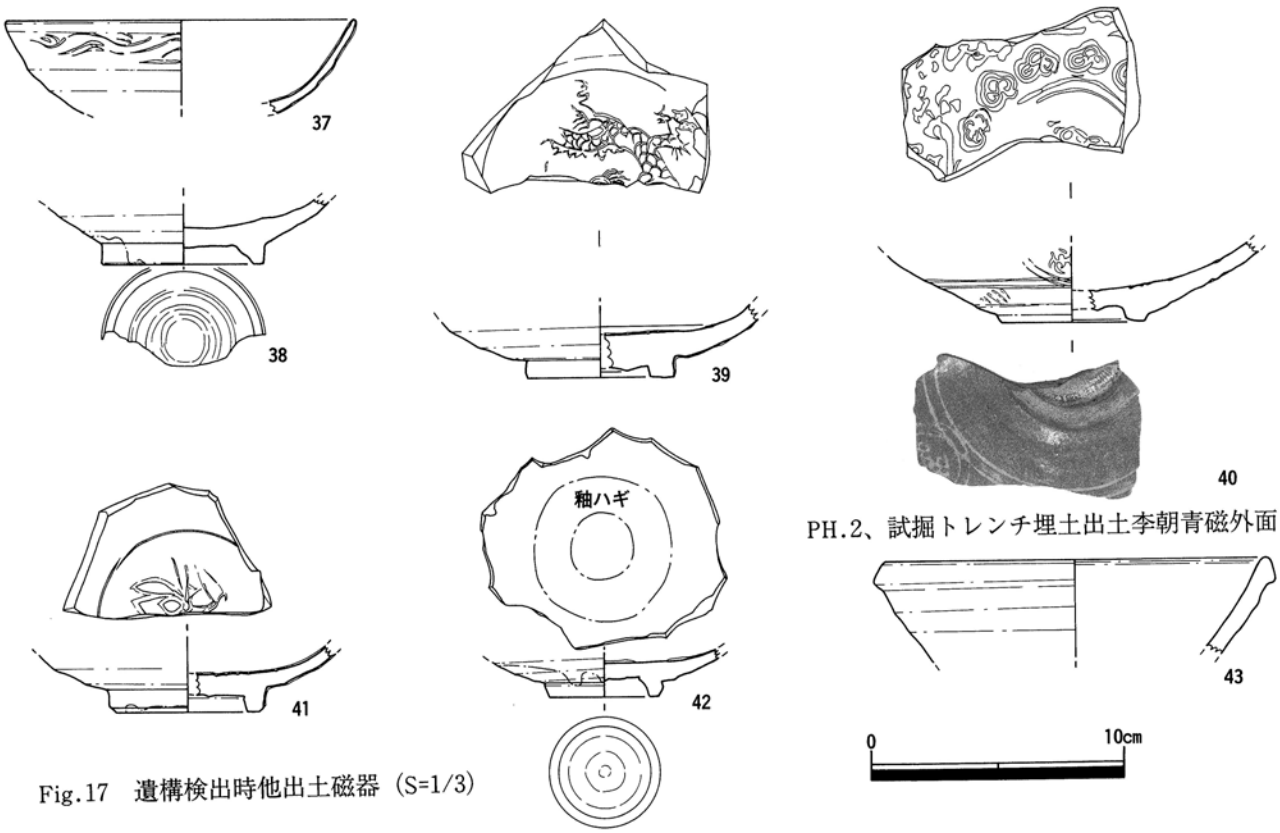


Fig.16 遺構検出時（包含層）出土土器・陶磁器(1)（S=1/3）



PH.2、試掘トレンチ埋土出土李朝青磁外面

Fig.17　遺構検出時他出土磁器（S=1/3）

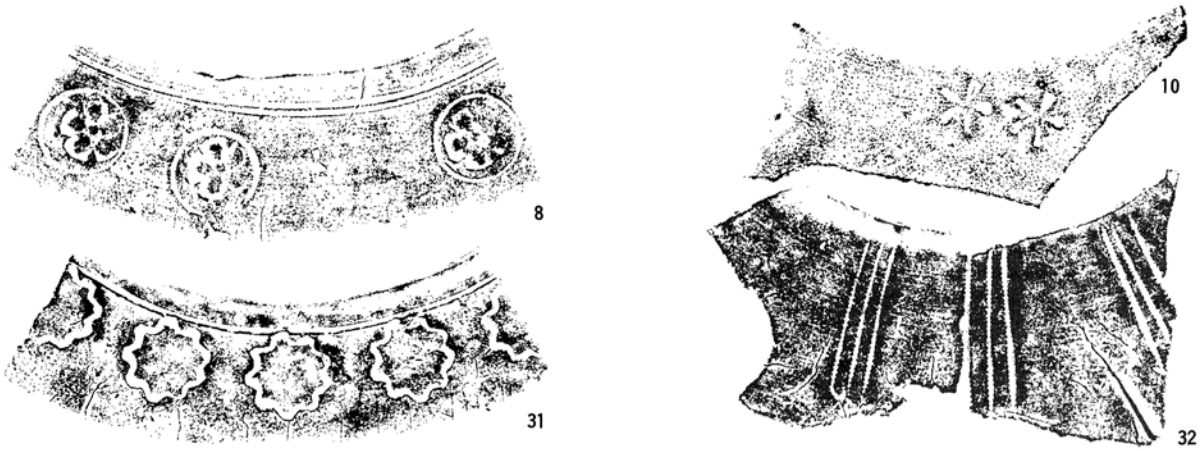


Fig.18 瓦質・土師質土器茶釜印刻文拓影（約1/2）

り、古文書等との対比も今後の課題となるだろう。三苫遺跡群は、従来の推定遺跡範囲の丘陵部だけではなく、海岸丘陵の後背湿地一帯に、中世～近世の集落や水田が展開している可能性が考えられ、今後の確認が必要である。

三苫遺跡出土貝類の放射性炭素年代測定と種類同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

三苫遺跡トレンチ調査では、地表面下約2.5m前後の堆積物中から貝類が出土している。今回の調査では、この貝類が堆積した年代を明らかにすることを目的として、放射性炭素年代測定を実施する。また、貝類についてはその組成を明らかにする。なお、貝類の種類同定は早稲田大学金子浩昌氏にお願いした。

1．試料（PL.3-21～23）

調査地点は5tr、6tr、7trの3トレンチである。各トレンチの地表面下2.7m、3.0m、2.2mの層準から貝化石が確認されている。試料は、各層準から採取された貝類であり、貝類同定後、一部を放射性炭素年代測定試料とした。

2．方法

（1）放射性炭素年代測定

年代測定は、学習院大学理学部年代測定研究室に依頼して測定して頂いた。

（2）貝類同定

肉眼および実体顕微鏡下で観察しながら種類の同定を実施した。

3．結果

（1）放射性炭素年代測定結果

年代測定結果を表1に示す。

表1　放射性炭素年代測定結果

地点	深度	状態	年代（1950年よりの年代）
5tr	2.7m	貝（イボキサゴ）	3610±140y.B.P.(1660B.C.)
6tr	3.0m	貝（オキシジミ）	3430±80y.B.P.(1480B.C.)
7tr	2.2m	貝（カガミガイ）	4030±70y.B.P.(2080B.C.)

（2）貝類

同定結果を表2に示す。検出された種類は14種類であり、分類一覧を以下に示す。

表2　貝類同定結果一覧

地点名	腹足綱						二枚貝綱								
	イボキサゴ	キサゴ	ヘナタリ	イボウミニナ	ウミニナ	ツメタガイ	サルボウガイ 右	ハイガイ 右	オキシジミ 左	オキシジミ 右	カガミガイ 左	カガミガイ 右	アサリ 右	ハマグリ 左	マテガイ	オオノガイ 左	オオノガイ 右
5tr	31	2	5		3												
6tr					2			1	2	1			1	1			
7tr			1	6	1	1	1				3	2		1	破2	1	1

軟体動物門　Phylum Mollusca

腹足綱　Class Gastropoda

ニシキウズガイ科　Family Trochidae

イボキサゴ　Umbonium moniliferum

キサゴ　Umbonium costatum

ウミニナ科　Family Viviparidae

ヘナタリガイ　Cerithidae

ウミニナ　Batillaria multiformis

タマガイ科　Family Naticidae

ツメタガイ　Neverita didyma

二枚貝綱　Class Bivalvia

フネガイ科　Family Arcida

サルボウガイ　Scapharca subcrenata

ハルガイ　Anadara granosa

マルスダレガイ科　Family Veneridae

オキシジミ　Cyslina orientalis

カガミガイ　Dosinia japonica

アサリ　Ruditapes philippinarum

ハマグリ　Meretrix lusoria

マテガイ科　Family Solenidae

マテガイ　Solen Strictus

エゾオオノガイ科　Family Myidae

オオノガイ　Mya arenaria

4．考察

検出された貝類のうち、イボキサゴおよびキサゴは内湾に生息する種類であり、他の貝は干潟ないし沿岸域に生息する種類である。これらの貝殻が混在し、堆積、保存されている各地点の堆積層は、潮間帯の堆積物であると考えられる。年代測定結果から、各地点の堆積層の堆積年代は約4,000～3,400年前頃になる。

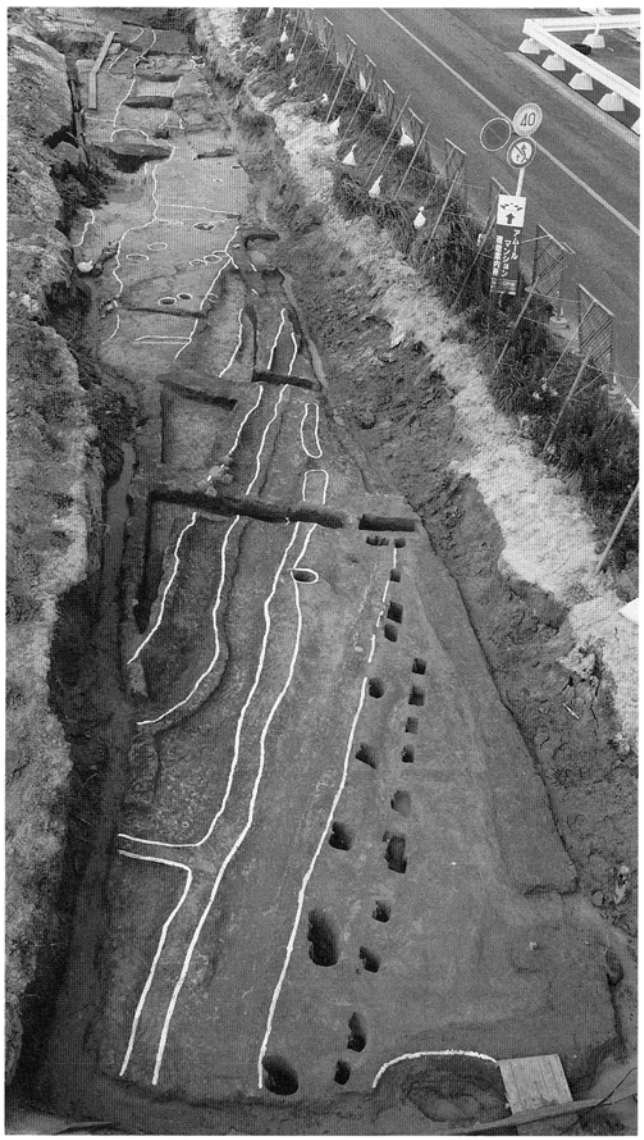
下山（1994）に示された福岡市周辺の過去9,000年間の海面変動曲線によれば、海進のピークは約4,700年前、海面の最高高度は＋2.2mであり、上述した今回の堆積層の年代では海進ピーク後の海退が停滞ないしはやや上昇に転じた時期であることが読み取れる。また、下山（1994）に示された海成層の分布限界すなわち高海面期の海岸線は美和台の台地の外縁ラインであるから、今回試料が採取された地点は、高海面期の海岸線からさほど海側へ後退していない。

以上のことから、今回の分析結果は、上述の下山（1994）の海面変化曲線によく対応しているといえる。福岡周辺における縄文時代以降の海岸線の変化は、縄文時代以降の遺跡の立地を考える際に常に考慮すべきことの一つである。

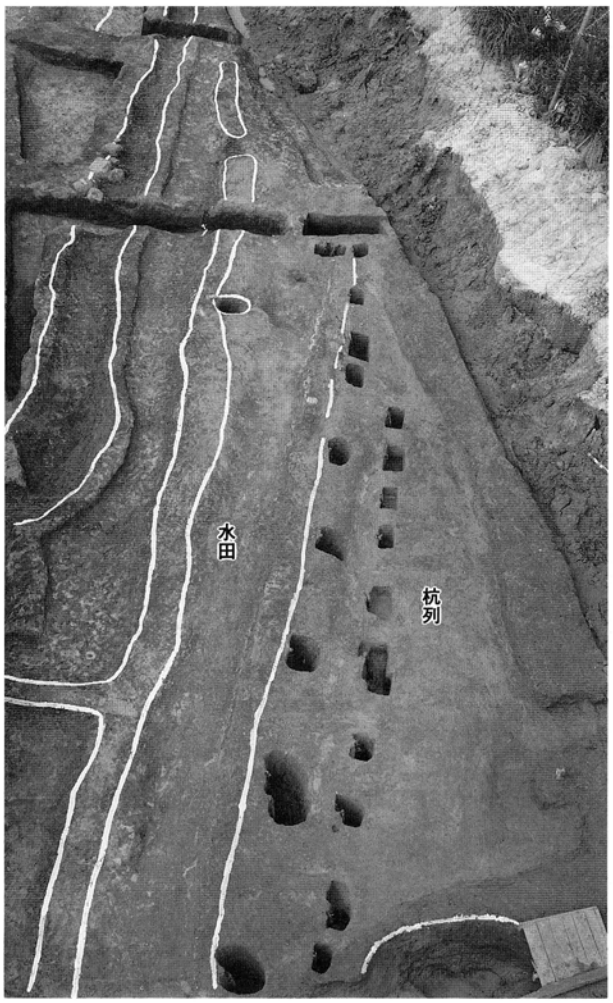
文献

下山正一（1994）北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向。第四紀研究，33，p.351-360.

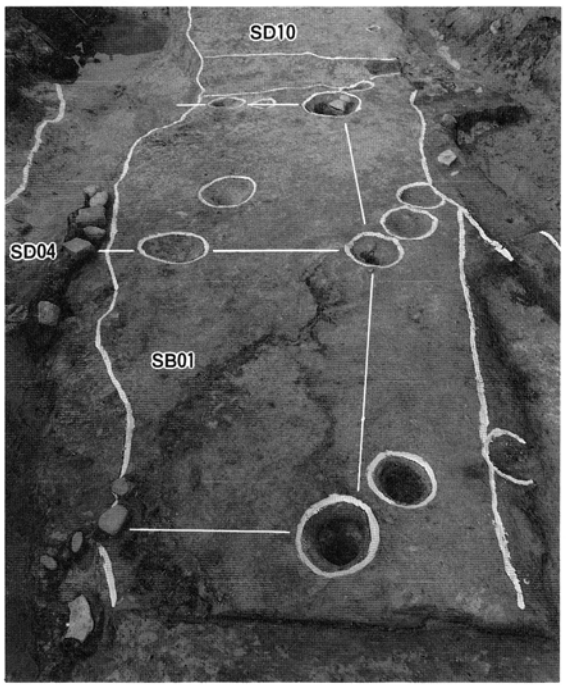
1．調査区全景（北から）



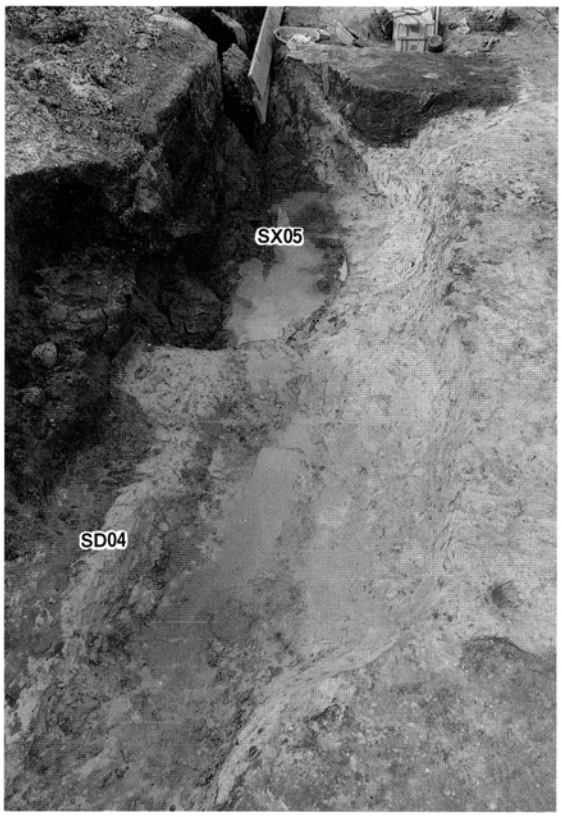
2．調査区全景（南から）



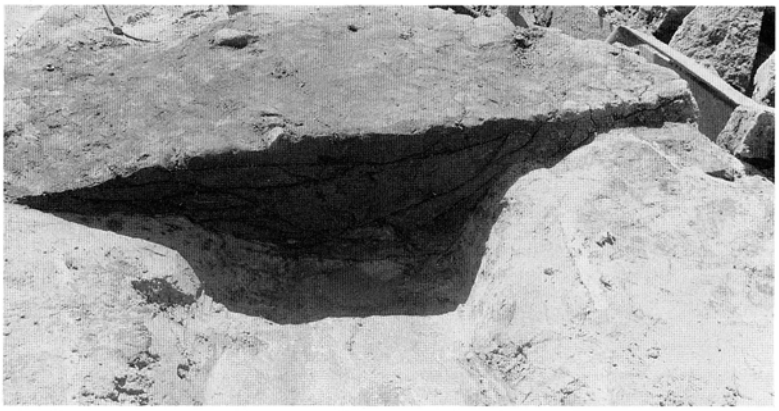
3．調査区南部水田址・杭列（南から）



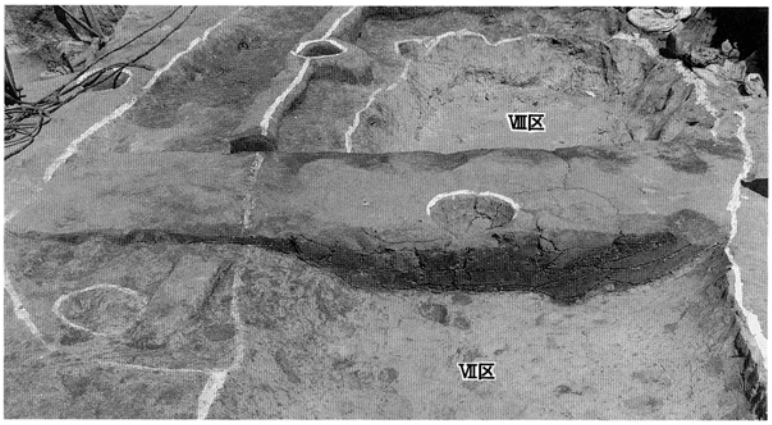
4．SB-01出土状況（南から）



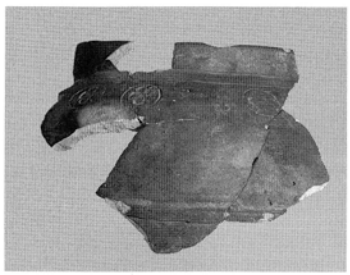
5．SD-04（Ⅱ・Ⅳ区）・SX-05（南から）



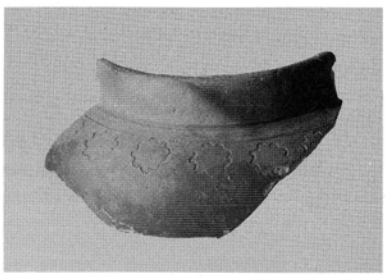
6．SD-04Ⅴ区南側土層状況（北から）



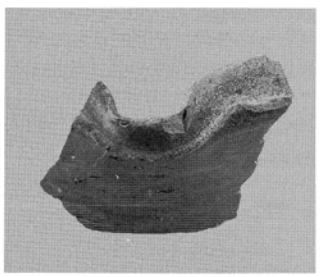
7．SD-04Ⅶ区北側土層状況（南から）



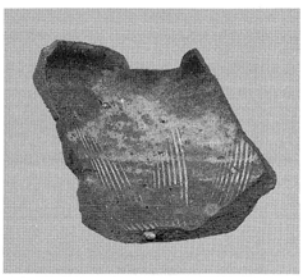
8．SD-04出土瓦質土器茶釜



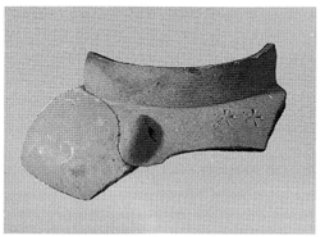
9．遺構検出時(包含層)瓦質土器茶釜



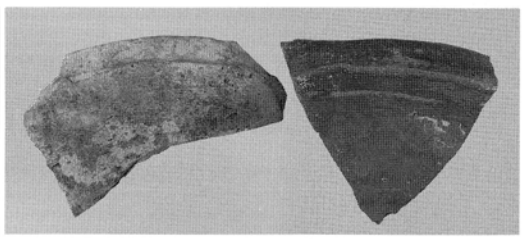
10．SD-04出土備前焼擂鉢



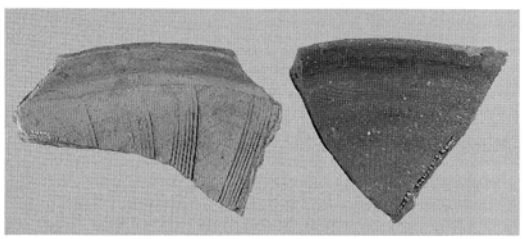
11．(10に同じ、内面)



12．SD-04出土土師質茶釜

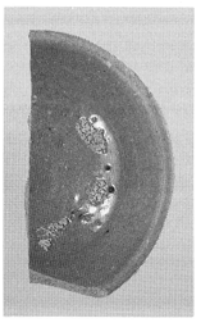


13．SD-04出土瓦質擂鉢(左)、検出時(包含層)出土備前擂鉢(右)



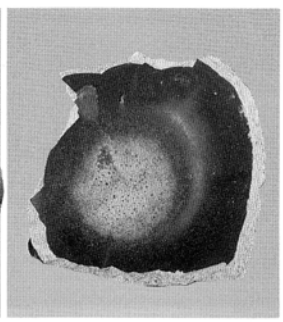
14．(13に同じ、内面)

15．SD-04出土
李朝青磁小碗

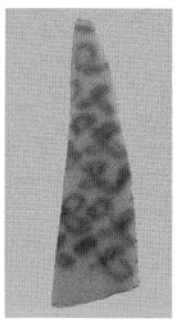


16．(15に同じ、内面)

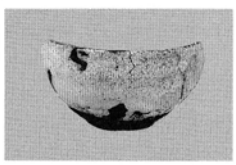
17．SD-04出土瀬戸
美濃系天目碗



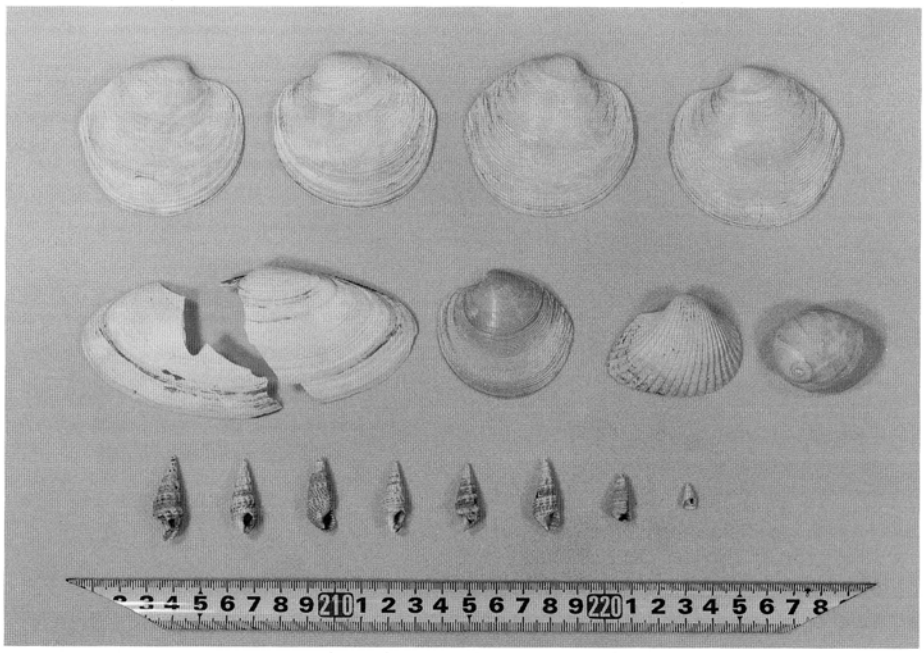
18．(17に同じ、内面)



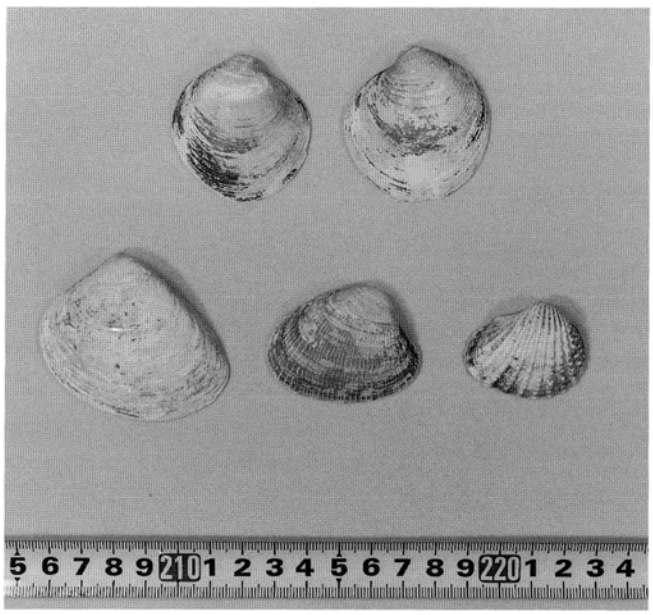
19．SD-04出土明代染付碗破片



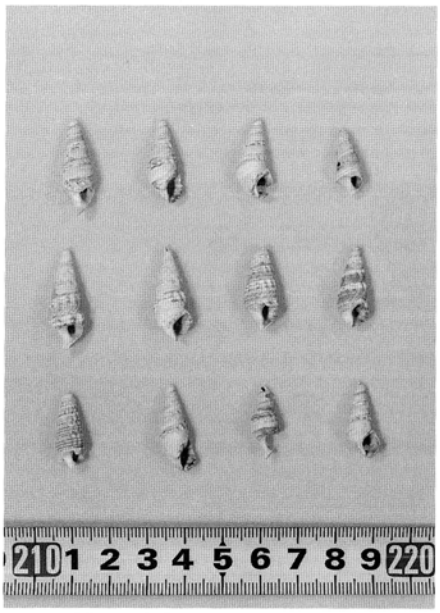
20．検出時(包含層)出土
唐津焼(？)小碗



21．試掘調査第6トレンチ　出土貝類



22．試掘調査第7トレンチ　出土貝類



23．試掘調査第5トレンチ　出土貝類

三　苫　遺　跡　群　3

―第4次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第548集

1998年（平成10年）3月31日

発　行　　福　岡　市　教　育　委　員　会

印　刷　　ダイヤモンド印刷株式会社

福岡市埋蔵文化財調査報告書第548集

Ph.3. 三苫遺跡群周辺の航空写真

1998

福岡市教育委員会